ふれあいボランティアパスポートを活用した
ボランティア体験学習の効果

－佐賀県神埼市における実践・調査報告書－

２０２２年３月

認定NPO法人
さわやか青少年センター

ふれあいボランティアパスポートを活用したボランティア体験学習の効果
－佐賀県神埼市における実践・調査報告書－

目　次

はじめに …… 1
Ⅰ　ボランティア活動活性化ツール「ふれあいボランティアパスポート」
　　について …… 2
1　さわやか青少年センターの理念と活動 …… 2
2　ふれあいボランティアパスポートについて …… 2
（1）ＦＶＰの構成内容
（2）ＦＶＰの種類
3　ＦＶＰの参加方法と参加状況 …… 5
（1）参加単位と参加方法
（2）単年度事業と継続の状況
Ⅱ　佐賀県神埼市における調査の概要と結果 …… 6
〈本調査の概要〉
〇本調査の対象地域
〇調査の種類
1　新成人ＶＡ調査（2015 年度～2020 年度：除 2016 年度） …… 6
（1）調査対象者
（2）調査方法と調査内容
2　児童生徒のＦＶＰ感想欄調査（2019 年度） …… 9
（1）調査対象者
（2）調査方法と調査内容
3　神埼市のＶ体験学習に対する取組姿勢ヒアリング調査（2019 年度） …… 9
（1）調査対象者
（2）調査方法と調査内容
4　参加 10 校のＶ体験学習推進の体制・活動内容アンケート調査
　　（2019 年度） …… 10
（1）調査対象者
（2）調査方法と調査内容
5　倫理的配慮 …… 10

Ⅲ　分析結果 ……11
1　神埼市新成人ＶＡ調査 ……11
1－1　新成人のＶ活動 ……11
（1）新成人はＶ活動に取り組んでいるか
（2）新成人は後輩にＶ活動を勧めるか
（3）小中高校生時代のＶ体験学習とその後の継続の状況
1－2　ＦＶＰの有効性 ……18
（1）小中学生時代にＦＶＰは役に立ったか
（2）小中学生時代のＦＶＰ活用の有効性と新成人のＶ活動は関係するか
（3）小中学生時代のＦＶＰ活用の有効性と「後輩にＶ活動を勧めるか」は関係するか
2　児童生徒のＦＶＰの感想欄調査（2019 年度） ……20
3　神埼市のＶ体験学習に対する取組姿勢ヒアリング調査（2019 年度） ……22
（1）Ｖ体験学習推進の姿勢
（2）ＦＶＰ活用の効果
（3）教育委員会におけるＦＶＰを活用したＶ体験学習実施の仕組み
4　参加 10 校のＶ体験学習推進の体制・活動内容アンケート調査（2019 年度） ……23
（1）校務分掌への位置付けの有無
（2）Ｖ体験学習の内容
（3）ＦＶＰの効果
（4）Ｖ体験学習により児童生徒にみられる成長の具体的な内容
Ⅳ　まとめと考察 ……27
1　Ｖ体験学習におけるＦＶＰ活用の効果 ……27
（1）ＦＶＰを活用した継続的なＶ体験学習の効果
（2）ＦＶＰ活用の効果の要因
2　ＦＶＰによるＶ体験学習のメカニズム ……28
3　なぜ効果が高まるのか ……29
おわりに ……31
（資料 1）神埼市新成人ボランティア活動アンケート調査用紙 ……32

［参考資料］ふれあいボランティア活動感想文 ……33

はじめに

さわやか青少年センター（以下、当法人）では、青少年が自ら「人間力（自助力と共助力)」を育むためには「ボランティア体験学習」が有効な取組の一つであると考え、「ボランティア体験学習」のきっかけや動機付け、活動継続のためのツールである「ふれあいボランティアパスポート」の普及に取り組んでいる。そして、青少年が成人になっても自らの「人間力」を育み続け、あるいは「人間力」を発揮することを期待している。

「ボランティア体験学習」は、青少年が豊かな人間性や社会性を育み、よりよい生き方、よりよい社会づくりを学ぶための体験学習の一つとして、広く学校教育現場で取り組まれてきた。1996 年の中央教育審議会では、21 世紀を展望した我が国の教育の在り方のキーワードとして「生きる力」を提唱し、その説明の中で「ボランティアなど社会貢献の精神も[生きる力] を形作る大切な柱である。」と述べている。そして、現行の学校教育法第 31・49・62 条においても、小中高等学校では「教育指導を行うに当たり、児童の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとする。」と明文化されている。

このような政策動向を背景として、当法人の「ふれあいボランティアパスポート」は、学校を中心に青少年健全育成団体等においても活用され、その中には 10 年以上継続活用してボランティア体験学習に取り組んでいる複数の学校、教育委員会等がある。

そこで、この度、長期間にわたり「ふれあいボランティアパスポート」を活用したボランティア体験学習の推進に取り組んでこられた佐賀県神埼市教育委員会の協力を得て、その継続的な取組の効果を分析するために、下記の調査を行った。

第 1 に、新成人ボランティア活動アンケート調査である。小中学校の時期に「ボランティア体験学習」に取り組んだ新成人を対象に、ボランティア活動に関する意識・行動や「ふれあいボランティアパスポート」への評価を調査した。第 2 に、児童生徒が「ふれあいボランティアパスポート」に記載した感想欄の内容分析である。第 3 に、教育委員会の学校教育担当者に対するヒアリング調査である。第 4 に、小中学校におけるボランティア体験学習の担当教員に対するアンケート調査である。

これらの調査の結果を総合的に分析することにより、「ふれあいボランティアパスポート」を活用したボランティア体験学習を継続的に実施することの効果が浮き彫りになった。この報告書が、ボランティア体験学習に関わっている全国の学校教育ならびに青少年健全育成の関係者の方々に活用されることを願ってやまない。

末筆ながら、本調査にご協力いただいた神埼市教育長はじめ教育委員会、小中学校、新成人の皆様、ご支援、ご協力いただいたすべての方々に心より感謝申し上げます。

2022 年 3 月 31 日

認定ＮＰＯ法人さわやか青少年センター
理事長　有馬　正史

Ⅰ　ボランティア活動活性化ツール「ふれあいボランティアパスポート」について

1　さわやか青少年センターの理念と活動

当法人は、青少年（当法人は幼児から高校生までを対象としている）一人一人の「生きる力」の根幹となる「人間力（自ら意欲的に生きていこうとする“自助力”とみんなで助け合って生きていこうとする“共助力”）」を、青少年が自ら育むよう支援する中間支援団体である。

「人間力」を小中高等学校期の児童生徒が育むには、当法人では「ボランティア体験学習」に取り組むことが有効であると考え、学校での教科や特別活動等でのボランティア体験学習の実施や、地域での自発的なボランティア体験学習を勧めることを、小中高・特別支援学校、青少年健全育成団体等に働きかけている。

ここで、「ボランティア体験学習」とは、次の 2 つを含めた用語として用いる。第 1 に、学校教育（含高等教育）において行われるボランティア体験活動を交えた児童生徒・学生の学習活動である。第 2 に、教員又は指導者が児童生徒・学生の自発性を促す指導によって、地域で児童生徒・学生が取り組むボランティア活動である。

2　ふれあいボランティアパスポートについて

ボランティア（以下、Ｖという）活動に関しては、その活性化を目的とするさまざまなツールが活用されている。これらは「Ｖ活動活性化ツール」と呼ばれ、Ｖ活動への参加や取組の動機付けや活動の継続、普及などを促している。

「ふれあいボランティアパスポート（以下、ＦＶＰという）」（図 1-①）は、当法人が展開するＶ活動活性化ツールであり、図 1-②はＦＶＰフレンズ（説明, p. 4（2））として参加している佐賀県神埼市教育員会オリジナルのフレンズＦＶＰである。ＦＶＰは、児童生徒が積極的にＶ体験学習に取り組むきっかけづくりや動機付け、活動への継続意欲の喚起などを目的として公益財団法人さわやか福祉財団が 2002 年に開発し、当法人が継承したものである。当法人では、教育委員会や小中高・特別支援学校、青少年健全育成団体等に無償提供することを通じてＶ体験学習の普及を図っている。

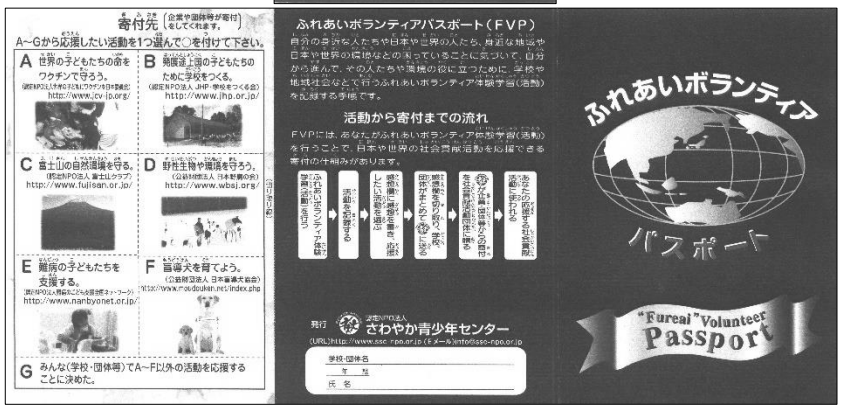
（図１－①）

ＦＶＰ

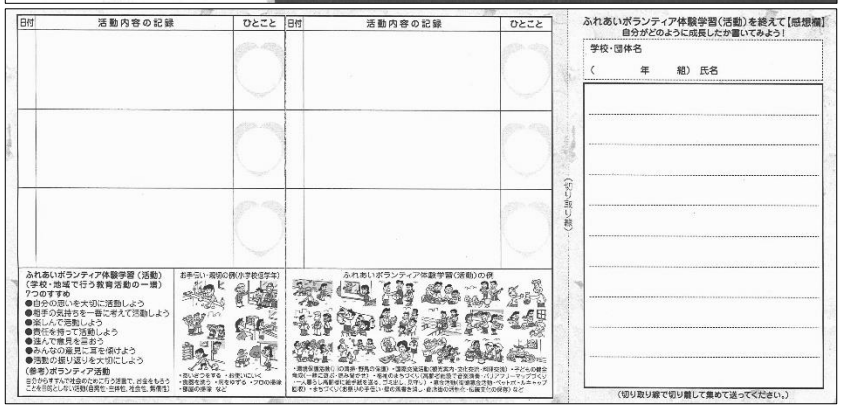
（図１－②）

ＦＶＰのフレンズＦＶＰ
（神埼市教育委員会
青少年育成市民会議 作成）

（表面）



（中面）



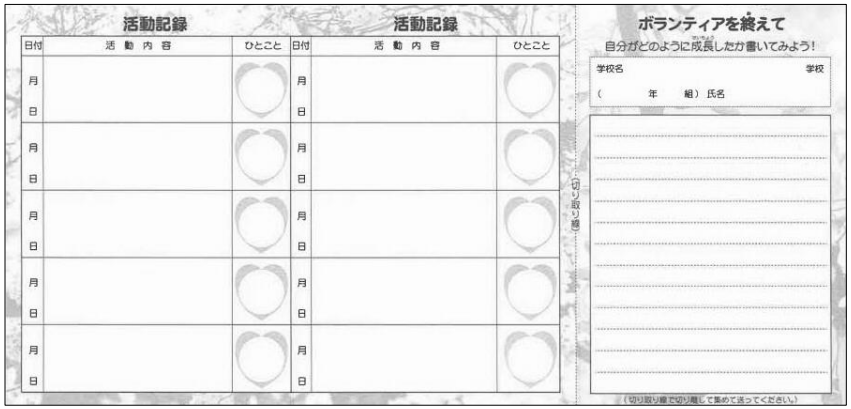


図１ ＦＶＰ（①ＦＶＰと②神埼市作成のオリジナルフレンズＦＶＰ：ともに（上段：表紙）（中段：表面）（下段：中面）三つ折り）

(1) ＦＶＰの構成内容

このＦＶＰは、パスポートサイズで三つ折りのカード形式（図 1-①）になっており、以下の４つのパートで構成されている。それぞれのパートは、以下のとおりである。

①ＦＶＰの説明欄（表面中央上部・中部）

ＦＶＰとはどのようなツールであるかについて、次のように説明している。

「自分の身近な人たちや日本や世界の人たち、身近な地域や日本や世界の環境などの困っていることに気づいて、自分から進んで、その人たちや環境の役に立つために、学校や地域社会などで行うふれあいボランティア体験学習（活動）を記録する手帳です。」

また、Ｖ体験学習から寄附までの流れ（活動⇒記録⇒感想⇒社会貢献）を示しており、ＦＶＰを手にした児童生徒や指導者がＦＶＰをどのように使えばよいのかを理解して取り組むことができるようにしている。

②Ｖ活動記録欄（中面左・中央）

記録欄を６回分設けている。児童生徒が自らの目標を克服する可能性と期待感、達成感につながる回数とした。6 回を超えた場合は、もう１枚手渡す仕組みとしており、自己肯定感や継続意欲につながることを期待している。神埼市教育委員会のフレンズＦＶＰは、図 1-②のとおり、記録欄は 10 回となっている。

また、児童生徒がどのような活動をすればよいのか、活動のヒントやきっかけづくりとして、記録欄の下段にＶ体験学習の取組事例をイラストで複数紹介している。

③感想欄（中面右）

この感想欄では、体験の感想や自分の成長を記録するようになっており、活動の「振り返り」をすることで、Ｖ体験学習が自分にとってどのような意味があったのかという学びや今後への意思を自ら確認する機会になることを期待している。

④社会貢献活動団体応援欄（表面左）（社会貢献活動団体６団体等への寄附を応援できる）

学習指導要領の総合的な学習の時間の配慮事項に例示された学習活動の国際理解、環境、福祉に関連した社会貢献活動団体がそれぞれ 2 団体ずつ計 6 団体とその他（6 団体以外の団体の応援を希望する場合は、参加する各学校・団体において話し合って決める）が記載されている。児童生徒は、Ｖ体験学習終了後に、上記７つの選択肢の中から、応援したい団体を自分の意思で選べるようになっており、ここでも自発性、主体性が発揮されるよう工夫をしている。そして、自分たちの活動と社会貢献活動とのつながりを確認し、ものごとを広い視野で捉えられるようになることを期待している。

運用面では、参加校・団体は児童生徒が選択した、それぞれ応援したい団体の人数をまとめて当法人に報告し、当法人は各参加校・団体からの報告数を合計して、社会貢献活動団体毎に応援したい児童生徒数の割合を算出し、企業や団体、個人からいただいた寄附の一部をその割合に応じて各社会貢献活動団体に寄附する仕組みとなっている。

(2) ＦＶＰの種類

学校等に活用いただくＦＶＰには 2 つの種類があり、1 つは当法人作成のＦＶＰを使用する方法と、もう１つはフレンズと呼ぶ方法で、学校・団体が独自のＦＶＰを作成し、上記(1)-④に記載の社会貢献活動団体応援の仕組みだけを共有するという方法である。2 種類のＦＶＰの選択は、学校・団体が決めている。

3　ＦＶＰの参加方法と参加状況

(1) 参加単位と参加方法

ＦＶＰ参加を希望する場合、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校などは原則として学校単位、教育委員会、青少年健全育成団体、その他公民館等は教育機関・団体単位で当法人に申込む。

参加については、当法人に学校・団体名、参加児童生徒数を申込書に明記し、申込みを行う。2012 年度から 2020 年度までの学校、団体数と参加人数は、次の表 1 のとおりである。

当法人がＦＶＰを継承した 2012 年度から 2020 年度までの間、延べ 1,230 校・55 団体、延べ 352,238 人の児童生徒がＦＶＰに参加している。

表1　ふれあいボランティアパスポート年度別参加校・団体・児童生徒数

年度	参加学校・団体数			参加児童生徒数(人)	備考
	学校（校）	団体（団体）	計（校・団体）		
2012年度	96	－	96	28,066	
2013年度	101	2	103	30,155	
2014年度	135	5	140	41,042	
2015年度	165	7	172	47,420	
2016年度	162	7	169	45,420	幼小中学校学習指導要領改訂2017.3.31
2017年度	159	9	168	47,008	高等学校学習指導要領改訂2018.3.30
2018年度	147	9	156	41,439	
2019年度	125	11	136	37,891	
2020年度	140	5	145	33,797	新型コロナウィルス感染拡大
9年間 延べ参加数	1,230	55	1,285	352,238	

（教育委員会による申込みは学校欄に学校数を計上している）

(2) 単年度事業と継続の状況

ＦＶＰは、毎年度、年度始めに参加募集を行うとともに、前年度参加校・団体に対しては継続参加の意思確認を行い、参加継続を希望する場合は、改めて当該年度の申込みを受け付けることになっている。

2020 年度は、表 2 のとおり、ＦＶＰの参加校・団体数は 145 であり、10 年以上継続している参加校が 14 校ある。その内訳は 18 年継続している学校が 10 校、15 年継続している学校が 2 校、14 年が 1 校、12 年が 1 校で、全体のおよそ 1 割（9.7%）に当たる。6 年以上継続になると 58 校 3 団体で、全体の 4 割を超える（42.1%）学校・団体が参加している。

表2　FVP継続年数区分別参加校・団体数(2020年度)

継続年数	学校数（校）	団体数（団体）	計（校・団体）	割合（%）	
新規	65	－	65	44.8%	
2年～5年	17	2	19	13.1%	
6年～9年	44	3	47	32.4%	42.1%
10年～18年	14	－	14	9.7%	
計	140	5	145	100.0%	

Ⅱ　佐賀県神埼市における調査の概要と結果

〈本調査の概要〉

○本調査の対象地域

本調査の対象地域は、以下の理由により佐賀県神埼市とした。

①ＦＶＰを活用した継続的なＶ体験学習の実施

神埼市教育委員会は、2006 年に旧千代田町、神埼町、脊振村が町村合併して誕生した神埼市の教育行政組織であるが、合併当初よりさわやか福祉財団のＦＶＰに参加し、当法人がＦＶＰを継承した 2012 年度以降もＦＶＰに継続参加している。本調査開始の 2015 年度より、表 4（p. 8）のとおり、神埼市の全 10 校（小学校 7 校と中学校 3 校）の児童生徒は、小学校、中学校で 5 年間以上、2019 年度からは 9 年間、継続してＦＶＰ（図１－②, p. 3）を活用したＶ体験学習に取り組んでいる。

②新成人ボランティア活動アンケート調査（以下、新成人ＶＡ調査という）実施の実現性

神埼市においては、新成人ＶＡ調査を実施することで、小中学生時代にＦＶＰを活用してＶ体験学習に取り組んだ新成人にアンケート調査用紙を配付し、回収することが可能である。神埼市にある小中学校は、公立の小学校が 7 校、中学校 3 校である。7 つの小学校の児童は、基本的に 3 つの中学校に進学し、卒業するとそれぞれ進学、就職していくが、成人式は神埼市教育委員会が行っており、成人式に参加する新成人はほとんどが市内の小中学校卒業生であることを神埼市役所に確認している。

③神埼市教育委員会の協力

神埼市教育委員会に調査の協力を依頼したところ、協力の承諾を得られた。

○調査の種類

神埼市をフィールドとして、以下の 4 つの調査を行った。

1 新成人ＶＡ調査（2015 年度～2020 年度：除 2016 年度）
2 児童生徒のＦＶＰ感想欄調査（2019 年度）
3 神埼市のＶ体験学習に対する取組姿勢ヒアリング調査（2019 年度）
4 参加 10 校のＶ体験学習推進の体制・活動内容アンケート調査（2019 年度）

1　新成人ＶＡ調査（2015 年度～2020 年度：除 2016 年度）

(1) 調査対象者

調査対象者は、表 3 に示したとおり、神埼市の小中学校でＦＶＰを活用してＶ体験学習に取り組み、卒業して新成人になり、成人式に参加した 2015 年度から 2020 年度（除 2016 年度：アンケートの回収不良のため分析中止）の 5 年度分の新成人のうち、アンケートに回答した合計 497 人の新成人である。

表3 神埼市年度別新成人VA調査実施状況

新成人VA調査実施年度	新成人数（人）	成人式出席者数（人）	新成人回答者数（人）	回答率（%）
2015年度	372	279	77	27.6%
2017年度	384	282	71	25.2%
2018年度	396	274	100	36.5%
2019年度	380	273	135	49.5%
2020年度	401	192	114	59.4%
計	1,933	1,300	497	38.2%

（除2016年度）

(2) 調査方法と調査内容

①調査方法

2015 年度から 2018 年度は、成人式会場にてアンケートコーナーを設け、アンケート調査用紙への記入の協力を呼びかけ、回収した。2019 年度、2020 年度は、予め新成人全員の配布資料の中にアンケート調査用紙を入れ、成人式の式典会場にてアンケート記入の時間を設け、一斉に回収した。

②調査内容

アンケート項目は、以下の内容となっている。巻末に新成人ＶＡ調査用紙（資料1, p. 32）を添付した。

1) 属性（性別･学生･自営業･会社員･その他）
2) 小中高校生時代にＶ活動にどのように取り組んだか
（積極的に取り組んだ･まあまあ取り組んだ･少し取り組んだ･取り組まなかった）
3) 小中学生時代にＦＶＰは役に立ったか
（大変役に立った･まあまあ役に立った･役に立たなかった）
4) 高校生時代にＶ活動に取り組んだ理由（11 項目から複数選択）
5) 新成人である現在、Ｖ活動にどのように取り組んでいるか
（積極的に取り組んでいる･まあまあ取り組んでいる･少し取り組んでいる･取り組んでいない）
6) Ｖ活動に取り組んでいる理由（10 項目から複数選択）
7) Ｖ活動の内容（9 項目から複数選択）
8) 後輩にＶ活動を勧めたいと思うか
（積極的に勧めたい･少し勧めたい･あまり勧めたくない･全く勧めたくない）

なお、当法人が定義しているＶ体験学習について、神埼市教育委員会では、Ｖ活動という呼び方で指導を行っていることから、新成人ＶＡ調査用紙（資料１）には小中学生時代と高校生時代まで含めてＶ活動と記載した。

③調査対象者の小中学生時代におけるＦＶＰを活用したＶ体験学習の状況

本調査で対象とした 2015 年度から 2020 年度までの新成人は、表 4 のとおり地域によりＦＶＰを活用したＶ体験学習の取組年数は異なるものの、小中学生時代に 5 年間から 9 年間ＦＶＰを活用したＶ体験学習に取り組んでいたと考えられる。また、同期間の神埼市全小中学校児童生徒のＦＶＰ参加人数と感想欄の回収率（表 5, p. 9）からＦＶＰ感想欄 6 年度分の回収率が 91. 1％であることを確認した。

これらのことから、調査対象の新成人は小中学生時代の各学年において 9 割程度は年 1 回以上、Ｖ体験学習に取り組んでいたものと考えられる。

本調査においては、少なくとも年１回以上のＶ体験学習を複数年続けて取り組むことを「継続」と定義することとする。

表4 神埼市新成人のFVPを活用したV体験学習年度別取組年数

		旧千代田町						旧神埼町・脊振村					
FVP提供													
2003年度 さわやか福祉財団	旧千代田町FVP参加	小1						小1					
		小2	小1					小2	小1				
2004年度		小3	小2	小1				小3	小2	小1			
2005年度		小4	小3	小2	小1			小4	小3	小2	小1		
2006年度	神埼市(町村合併)全10校FVP参加	小5	小4	小3	小2	小1		小5	小4	小3	小2	小1	
2007年度		小6	小5	小4	小3	小2	小1	小6	小5	小4	小3	小2	小1
2008年度		中1	小6	小5	小4	小3	小2	中1	小6	小5	小4	小3	小2
2009年度		中2	中1	小6	小5	小4	小3	中2	中1	小6	小5	小4	小3
2010年度		中3	中2	中1	小6	小5	小4	中3	中2	中1	小6	小5	小4
2011年度		高1	中3	中2	中1	小6	小5	高1	中3	中2	中1	小6	小5
2012年度 さわやか青少年センター		高2	高1	中3	中2	中1	小6	高2	高1	中3	中2	中1	小6
2013年度		高3	高2	高1	中3	中2	中1	高3	高2	高1	中3	中2	中1
2014年度		19歳	高3	高2	高1	中3	中2	19歳	高3	高2	高1	中3	中2
2015年度	2015年度新成人アンケート調査対象者	小2から8年間	19歳	高3	高2	高1	中3	小5から5年間	19歳	高3	高2	高1	中3
2016年度	アンケート調査データ回収不良のため分析中止		小1から9年間	19歳	高3	高2	高1		小4から6年間	19歳	高3	高2	高1
2017年度	2017年度新成人アンケート調査対象者			小1から9年間	19歳	高3	高2			小3から7年間	19歳	高3	高2
2018年度	2018年度新成人アンケート調査対象者				小1から9年間	19歳	高3				小2から8年間	19歳	高3
2019年度	2019年度新成人アンケート調査対象者					小1から9年間	19歳					小1から9年間	19歳
2020年度	2020年度新成人アンケート調査対象者						小1から9年間						小1から9年間

表5　神埼市全小中学校年度別FVPへの参加人数と感想欄回収状況

年度	学校数	児童・生徒総数（人）	感想欄回収数（枚）（＝FVP参加人数）（＝V体験学習取組人数）	感想欄回収率（＝V体験学習取組率）
2015年度	小学校7校・中学校3校	2,741	2,558	93.3%
2016年度	小学校7校・中学校3校	2,677	2,556	95.5%
2017年度	小学校7校・中学校3校	2,677	2,503	93.5%
2018年度	小学校7校・中学校3校	2,627	2,434	92.7%
2019年度	小学校7校・中学校3校	2,572	2,389	92.9%
2020年度	小学校7校・中学校3校	2,519	1,962	77.9%
合計		15,813	14,402	91.1%

（2020年度は新型コロナウイルス感染拡大）

2　児童生徒のＦＶＰ感想欄調査（2019 年度）

（1）調査対象者

上記の表５のとおり、神埼市では全小中学校のほとんどの児童生徒がＦＶＰを活用したＶ体験学習に取り組んでいる。2019 年度のＶ体験学習に取り組んだ児童生徒の人数は 2,389 人であったことから、この 2,389 人の感想を本調査の対象とした。

（2）調査方法と調査内容

①調査方法

ＦＶＰでは、各学校は毎年度 2 月 15 日までに児童生徒の感想欄を当法人に送付することとしている。神埼市では、毎年度、教育委員会は各学校が児童生徒から回収した感想欄を全数まとめて、当法人に送付している。本調査では、2019 年度の神埼市全校分の感想欄 2,389 枚について、当法人が 1 枚ずつ読んでその内容により仕分けする方法をとった。

②調査内容

本調査では、ＦＶＰを通じてのＶ体験学習に対する感想や思い、児童生徒のＶ体験学習への意欲などの確認を目的として、2019 年度の児童生徒 2,389 人の感想欄に記載の内容を共通する言葉でできるだけまとめて、表 14(p. 21)のとおり、共通する内容で仕分けし、分析した。

3　神埼市のＶ体験学習に対する取組姿勢ヒアリング調査（2019 年度）

（1）調査対象者

教育委員会学校教育担当者（1 人）、青少年育成市民会議担当者（１人）

（2）調査方法と調査内容

①調査方法

事前に学校教育担当者に質問紙を送った上で、2020 年 1 月 12 日に成人式会場にて対面でヒアリング調査を行った。

②調査内容

1）Ｖ体験学習への姿勢、2）Ｖ体験学習の仕組み、3）Ｖ体験学習の最終目標、4）ＦＶＰについての理解・評価を調査内容とした。

4　参加 10 校のＶ体験学習推進の体制・活動内容アンケート調査（2019 年度）

（1）調査対象者

小学校 7 校、中学校 3 校（全 10 校）のＶ体験学習担当教員

（2）調査方法と調査内容

①調査方法

教育委員会の協力を得て、教育委員会を通じてアンケート調査票を全 10 校へ配信し、2020 年 1 月 17 日から 2 月 10 日に各校担当者から回収した回答票を教育委員会経由で当法人が受領した。

②調査内容

1）学校のＶ体験学習の方針
2）校務分掌への位置付けの有無
3）学校全体で取り組んでいるＶ体験学習
4）学年単位で取り組んでいるＶ体験学習
5）各クラスで取り組んでいるＶ体験学習
6）放課後のＶ体験学習
7）地域でのＶ体験学習
8）児童生徒が地域で自発的に行っているＶ体験学習
9）ＦＶＰの効果（Ｖ体験学習のきっかけ・動機付けについて、児童生徒のＶ体験学習の継続性について、その他）
10）児童生徒がＶ体験学習をすることで、どのような成長がみられると考えているか

5　倫理的配慮

本調査においては、教育委員会社会教育課の附属機関である青少年育成市民会議担当者立会いのもと、神埼市教育長に対面にて趣旨、及び調査の概要とその結果を実践・調査報告書にまとめ、広く紹介していくことを説明し、教育長より承諾を得た。教育委員会学校教育担当者へのヒアリング及び学校Ｖ活動担当者アンケート調査において得られた情報については、個人情報が特定されないように分析を行った。また、当実践・調査報告書の草案を青少年育成市民会議担当者に提出し、その内容と当報告書に神埼市の名称を出すことについて、教育長より承認をいただいた。

Ⅲ　分析結果

1　神埼市新成人ＶＡ調査

本調査の分析は、大きく新成人のＶ活動（本章では、便宜上、学生が授業等で行うＶ体験学習も含め、Ｖ活動と総称する）とＦＶＰの有効性の２つに分けて行った。その際、質問の選択肢の回答は、質問への可否で２つに分けて、分析を行った。分析に当たっては、単純集計とともにクロス集計を行い、クロス集計のデータ解析においては独立性のχ^2検定を行った。独立性のχ^2検定を行うに当たっては、無回答は除いた。

1－1　新成人のＶ活動

(1) 新成人はＶ活動に取り組んでいるか　－新成人のＶ活動取組率は 65.6%－

2015 年度から 2020 年度（除 2016 年度）の 5 年度分にわたる新成人ＶＡ調査の結果を示すと表 6 のとおりとなる。

表6　神埼市新成人(年度別・学生・社会人別)ボランティア活動取組人数・取組率

新成人(学生・社会人別)ボランティア活動に取り組んでいるか		2015年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度		合計	
		（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
学生	取り組んでいる	29	61.7	32	56.1	45	71.4	54	62.8	52	71.2	212	65.0
	取り組んでいない	17	36.2	25	43.9	17	27.0	31	36.0	20	27.4	110	33.7
	無回答	1	2.1	0	0.0	1	1.6	1	1.2	1	1.4	4	1.2
	計	47	100.0	57	100.0	63	100.0	86	100.0	73	100.0	326	100.0
社会人	取り組んでいる	16	64	9	69.2	28	75.7	34	69.4	23	56.1	110	66.7
	取り組んでいない	6	24	4	30.8	7	18.9	15	30.6	16	39.0	48	29.1
	無回答	3	12	0	0.0	2	5.4	0	0.0	2	4.9	7	4.2
	計	25	100.0	13	100.0	37	100.0	49	100.0	41	100.0	165	100.0
無回答	取り組んでいる	3	60.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	66.7
	取り組んでいない	2	40.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	33.3
	無回答	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	計	5	100.0	1	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	6	100.0
新成人　取り組んでいる合計		48	62.3	42	59.2	73	73.0	88	65.2	75	65.8	326	65.6
新成人 合計		77	100.0	71	100.0	100	100.0	135	100.0	114	100.0	497	100

（除2016年度）

5 年度分の新成人ＶＡ調査に回答した 497 人のうち、現在Ｖ活動に取り組んでいると回答した新成人は 326 人（65.6%）であった。また、各年度の新成人のＶ活動取組率をみると、59.2%から 73.0%の間で安定して推移している。学生と社会人を分けてみると、現在Ｖ活動に取り組んでいると回答した 5 年度分の学生数の割合は 65.0%、社会人の割合は 66.7%となり、若干社会人の取組率が高いが、学生も社会人もともに 65%以上のＶ活動取組率となっている。

表 7（p. 13）は、上記の①神埼市ＶＡ調査結果、②「大学生のボランティア活動等に関する調査」(注 1)、③「平成 28 年度社会生活基本調査」(注 2) の調査結果を比較したものである。3 つの調査を比較するため、同等の属性のデータを抽出して表を作成している。

（注 1）『「大学生のボランティア活動等に関する調査」報告書』（国立青少年教育振興機構　青少年教育研究センター、2020 年）より。

（注 2）「平成 28 年社会生活基本調査結果」（総務省統計局）より。
https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/kekka.html
（2021 年 12 月 1 日に利用）
「平成 28 年社会生活基本調査結果」（総務省統計局）
https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/kekka.html
を加工して作成

この比較は、当法人が行った新成人対象のＶＡ調査と比較できる同様の調査が見当たらなかったために、試みとして行うものである。②③ともに規模や対象等に差異がある調査であるため、単純に比較できるものではないことを申し述べておく。

今回の調査の比較に当たっての調整について説明する。まず各調査の「対象年齢」であるが、①神埼市新成人ＶＡ調査の新成人は 1 月の成人式の段階で 19 歳か 20 歳である。②は同じく大学、短大の 2 年生（調査時点が 3 月上旬）であることから「19 歳～20 歳」である。③は 5 歳区分での調査であることから、「15 歳～19 歳」と「20 歳～24 歳」の 2 つのグループを合計して再集計し「15 歳～24 歳」を対象年齢とした。

次に、「学生」については、①はアンケート調査用紙の職業欄には「学生」という選択肢のみであったことから、「学生」を選択した新成人は大学生・短大生ばかりではなく、専門学校生等も含んでいると定義した。そのため、②『「大学生のボランティア活動等に関する調査」報告書』第 2 章の「大学生のボランティア活動の実態～Web アンケート調査結果～」が対象としている「大学・短大生」より「学生」の範囲が広いということを申し添えておく。③は「ふだんの就業状態」から有業者（通学のかたわらに仕事）及び無業者（通学）を選択し、対象とした。「社会人」については、①は職業の選択肢（学生、自営業、会社・行政等勤務、無職、その他）から、学生、無職、その他を除いた新成人を「社会人」とし、③は「ふだんの就業状態」から有業者（主に仕事）を選択し、対象とした。なお、Ｖ活動については、①、②は学校におけるＶ体験学習を含むことが前提となっており、③のＶ活動の要件は自発性、貢献性、無償性を満たす活動となっている。

これらを踏まえた上で、「学生」について比較した結果、①の「学生」におけるＶ活動取組率は 65.0％であるが、②は 36.6％、③は有業者（通学のかたわらに仕事）27.1％、無業者（通学）23.1％であった。「社会人」について比較すると、①の「社会人」におけるＶ活動取組率は 68.4％であるが、③は 14.4％であった。

以上のことから、神埼市新成人のＶ活動取組率を、②③の調査結果と「学生」、「社会人」で比較した結果、いずれも神埼市の新成人がＶ活動を行う傾向は全国的な傾向に比べてかなり強いということが推測される。

表7　神埼市新成人VA調査・大学生のボランティア活動の実態に関する調査・社会生活基本調査における
新成人時のV活動取組状況(学生・社会人)比較

①神埼市新成人VA調査 （対象年齢：19歳～20歳）				②大学生のボランティア活動の実態 ～webアンケート調査結果～ （対象年齢：19歳～20歳）				③社会生活基本調査 （対象年齢：15歳～24歳）			
職業	調査人数 （人）	V活動取組者数 （人）	V活動取組率 （%）	職業	調査人数 （人）	V活動取組者数 （人） （本来の項目は「参加したことがある」）	V活動取組率 （%） （本来の項目は「参加したことがある割合」）	職業 （本来の項目は「ふだんの就業状態」）	推定人口 （千人）	V活動取組者数 （千人） （本来の項目は「行動者数」）	V活動取組率 （%） （本来の項目は「行動者率」）
学生	326	212	65.0	大学・短大 2年生	481	176	36.6	有業者 （通学のかたわらに仕事）	2,189	594	27.1
								無業者 （通学）	5,920	1,365	23.1
社会人	133	91	68.4					有業者 （主に仕事）	3,297	475	14.4
各調査の説明と算出方法	・神埼市新成人VA調査は、例年１月神埼市の成人式の日に実施している。 ・2015～2020年度（除2016年度）の5年度分を合計した。 ・新成人は、VA調査に回答した新成人（無職・その他を含む）合計497人のうち、無回答6人を除いた学生・社会人の計491人を対象としている。 ・「学生」は、アンケートに校種の記載をしていないため、大学・短大・専門学校等のどの学校に所属しているかは不明であるが「通学している」と認識している者である。 ・社会人については、③の条件に近づけるために社会人（自営業、会社・行政等勤務、無職、その他）165人から無職、その他の32人を除いた。 ・無回答6人も除いている。				・「大学生のボランティア活動等に関する調査」報告書 令和２年3月（国立青少年教育振興機構） （調査期間：平成31年3月上旬） ①大学生のボランティア活動の実態に関する調査 ・第2章大学生のボランティア活動の実態～webアンケー　ト調査結果～（2）ボランティア活動・社会貢献活動への参加状況の図2-2-1から当法人が抜粋し、作成した。 ・調査対象者は、大学・短大の2年生のみを抜粋した。 ・アンケート項目は、（1-1で、ボランティア活動・社会貢献活動をしたことがあるに〇をつけた後の問1-2）：大学・　短大入学後に行ったボランティア活動・社会貢献活動はどのようなものでしたか（〇は1つだけ）。 ・選択肢は、（1.「自主的に参加したもの」のみ、2.「授業やゼミの一環で参加したもの」（単位にかかわるもの）のみ、3.「自主的に参加したもの」と「授業やゼミの一環で参加したもの」の両方）。 ・2年生の回答者数に、選択肢1.～3.を合わせて「参加したことがある」にまとめた合計の割合を掛けて、「参加したことがある」の人数を当法人が算出した。 ・調査項目の下段に②調査の本来の調査項目を示した。				・平成28年（2018年）社会生活基本調査（10月実施） ・総務省統計局ホームページより当法人が抜粋、再集計し作成した。 ・生活行動－全国（調査票A）ボランティア活動（V活動の要件として①自発性②貢献性③無償性を上げている） ・ボランティア活動について、過去1年間（平成27年10月20日～28年10月19日）に、それぞれの種類別に活動を行ったか否か、行った場合には、活動頻度や目的、共にした人などを調査し、公表されているExcelデータ 第42－1表 男女,ふだんの就業状態,ふだんの健康状態,頻度,年齢,ボランティア活動の種類別行動者数(15歳以上)－全国を使用して、ふだんの就業状態の項目から該当する就業状態・年齢の人がボランティアを行った人数を算出し、その割合を出した。 ・社会生活基本調査は、5歳区分での集計のため、神埼市の新成人成人式時の年齢19歳、20歳の比較に対応する15歳～19歳、20歳～24歳を対象として、15歳～24歳に合計して集計した。 ・有業者（通学のかたわらに仕事）は、あくまでも通学が主であり、その他に仕事もしているということである。 ・有業者（主に仕事）は、家事や無業者、通学、その他を除いた者。 ・調査項目の下段に③調査の本来の調査項目を示した。			

(2) 新成人は後輩にＶ活動を勧めるか

－新成人は「後輩にＶ活動を勧める」は 85.1％－

表 8 より、5 年度分の新成人ＶＡ調査に回答した 497 人の中で、後輩にＶ活動を勧めると回答した新成人は 423 人で 85.1％であった。図 2 は、新成人のＶ活動と「新成人がＶ活動を後輩に勧めるか」は関係するかについて表 8 の無回答を除いてクロス集計したものである。これによると、Ｖ活動を後輩に勧める新成人は、新成人がＶ活動に取り組んでいる場合は 94.6％、取り組んでいない場合は 82.3％であり、取り組んでいる新成人のほうが取り組んでいない新成人よりも後輩にＶ活動を勧める傾向が強い。

新成人のＶ活動と「Ｖ活動を後輩に勧めるか」について独立性の χ^2 検定を行った結果、有意差がみられ（$p<0.01$）、有意な正の関係にあることが明らかになった。

表8　新成人のV活動参加と後輩にV活動を勧めるの関係

新成人V活動クロス集計表	後輩にV活動勧める		後輩にV活動勧めない		無回答		合計	
	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）	（人）	（%）
取り組んでいる	298	91.4	17	5.2	11	3.4	326	100.0
取り組んでいない	121	75.6	26	16.3	13	8.1	160	100.0
無回答	4	36.4	0	0.0	7	63.6	11	100.0
合計	423	85.1	43	8.7	31	6.2	497	100.0

（2015～2020年度：除2016年度）

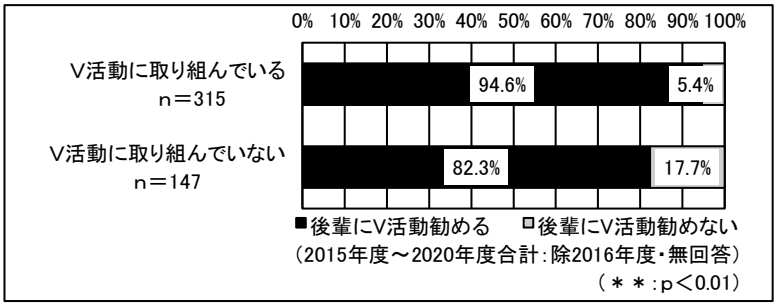


図 2　新成人の V 活動と後輩に V 活動を勧めるの関係

また、表 13(p. 17)の小中高校生時代継続してＶ体験学習に取り組み、新成人になってもＶ活動・Ｖ体験学習に取り組んでいる 268 人（497 人の 53.9％）が「後輩にＶ活動を勧めるか」をクロス集計した結果、表 9 のとおり 92.5％と非常に高い割合で後輩に勧めると回答している。

表9　小中高校生、新成人とV体験学習・V活動に継続して取り組んだ新成人は後輩にV活動を勧めるか

小中高校生、新成人V活動・V体験学習継続		後輩に勧める	後輩に勧めない	無回答	計
取り組んでいる	人数	248	13	7	268
	割合	92.5%	4.9%	2.6%	100.0%

以上のことから、小中高校生時代と継続してＶ体験学習に取り組んだ新成人は後輩にＶ活動を勧める傾向が強く、とりわけ、現在Ｖ活動に取り組んでいる者ほど、その傾向は強いことが明らかになった。

(3) 小中高校生時代のＶ体験学習とその後の継続の状況

①小中学生時代のＶ体験学習取組状況　－小中学生時代継続の取組率は 86.1％－

表 10 は、小中学生時代におけるＶ体験学習の取組状況である。小中学生時代に「Ｖ体験学習に取り組んだ」と回答した新成人の割合は、小学生時代 90.3％、中学生時代 90.1％であった。また、小中学生時代に「継続してＶ体験学習に取り組んだ」と回答した新成人の５年度分合計の割合は、86.1％であった。

表10 小中学生時代における年度別V体験学習取組人数･取組率

	V体験学習に取り組んだか（人）	2015年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2015～2020年度合計
小学生時代	取り組んだ	64	66	91	126	102	449
	取り組まなかった	10	4	9	9	9	41
	無回答	3	1	0	0	3	7
	計	77	71	100	135	114	497
	取組率（%）	83.1	93.0	91.0	93.3	89.5	90.3
中学生時代	取り組んだ	66	62	90	126	104	448
	取り組まなかった	8	8	10	8	9	43
	無回答	3	1	0	1	1	6
	計	77	71	100	135	114	497
	取組率（%）	85.7	87.3	90.0	93.3	91.2	90.1
小中学生時代継続※	取り組んだ	60	60	87	122	99	428
	取り組まなかった	15	11	13	13	14	66
	無回答	2	0	0	0	1	3
	計	77	71	100	135	114	497
	取組率（%）	77.9	84.5	87.0	90.4	86.8	86.1

（※取り組まなかった：小中取り組まなかった、小または中に取り組まなかった、無回答の合計。 無回答：小中無回答）（除2016年度）

②高校生時代のＶ体験学習取組状況　－高校生時代の取組率は 74.0％－

表 11 は、高校生時代におけるＶ体験学習の取組状況である。高校生時代の「Ｖ体験学習に取り組んだ」と回答した新成人の割合は、74.0％であった。神埼市教育委員会の取組は小中学校を対象にしているが、高校生時代においてもＶ体験学習取組率は 10％程度低くなるものの、高い取組率を継続していたことが明らかになった。

表11 高校生時代における年度別V体験学習取組人数・取組率

	V体験学習に取り組んだか（人）	2015年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2015～2020年度合計
高校生時代	取り組んだ	57	42	75	107	87	368
	取り組まなかった	16	27	24	27	26	120
	無回答	4	2	1	1	1	9
	計	77	71	100	135	114	497
	取組率（%）	74.0	59.2	75.0	79.3	76.3	74.0

（除2016年度）

③小中学生時代のＶ体験学習と高校生時代のＶ体験学習は関係するか

－小中学生時代継続し、高校生時代も取り組んだ者は 80.9％－

表 12 は、2015 年度から 2020 年度（除 2016 年度）のそれぞれの項目の対象となる人数を 5 年度分合計してクロス集計したものである。小学生時代にＶ体験学習に取り組んだ者のうち高校生時代にも取り組んだ者は 79.1％、中学生時代に取り組んだ者のうち高校生時代にも取り組んだ者は 80.3％、小中学生時代に継続して取り組んだ者のうち高校生時代にも取り組んだ者は 80.9％となった。

以上のことから、小中学生時代に継続してＶ体験学習に取り組んだ者は、高校生時代にも取り組む傾向が強いことが明らかになった。

表12 小中学生時代のV体験学習と高校生時代のV体験学習の関係

V体験学習クロス集計			高校生時代				独立性のχ^2検定結果
			取り組んだ	取り組まなかった	計	合計	
小学生時代	取り組んだ	（人）	351	93	444	485	**
		（%）	79.1	20.9	100.0		
	取り組まなかった	（人）	15	26	41		
		（%）	36.6	63.4	100.0		
中学生時代	取り組んだ	（人）	355	87	442	485	**
		（%）	80.3	19.7	100.0		
	取り組まなかった	（人）	10	33	43		
		（%）	23.3	76.7	100.0		
小中学生時代継続	取り組んだ	（人）	342	81	423	448	**
		（%）	80.9	19.1	100.0		
	取り組まなかった	（人）	4	21	25		
		（%）	16.0	84.0	100.0		

（2015年度～2020年度合計：除2016年度・除無回答）（**：p＜0.01）

次に、小学生時代、中学生時代、小中学生時代継続してのＶ体験学習参加が高校生時代のＶ体験学習参加と関係するか、それぞれ独立性のχ^2検定を行った。その結果、すべてにおいて有意差が認められ（ｐ＜0.01）、小学生時代、中学生時代、小中学生時代継続してのＶ体験学習参加と高校生時代のＶ体験学習参加は、それぞれ有意な正の関係にあり、継続性が認められた。

④小中高校生時代のＶ体験学習と新成人のＶ活動は関係するか

－年代が上がるにつれて関係が強くなる。また、継続すると更に強くなる－

表 13 は、2015 年度から 2020 年度（除 2016 年度）のそれぞれの項目の対象となる人数を 5 年度分合計してクロス集計したものである。

表13 小中高校生時代のV体験学習と新成人のV活動の関係

V体験学習・V活動クロス集計			新成人V活動				独立性のχ^2検定結果
V体験学習			取り組んでいる	取り組んでいない	計	合計	
小学生時代	取り組んだ	(人)	309	134	443	482	**
		(%)	69.8	30.2	100.0		
	取り組まなかった	(人)	14	25	39		
		(%)	35.9	64.1	100.0		
中学生時代	取り組んだ	(人)	314	127	441	482	**
		(%)	71.2	28.8	100.0		
	取り組まなかった	(人)	8	33	41		
		(%)	19.5	80.5	100.0		
高校生時代	取り組んだ	(人)	286	77	363	480	**
		(%)	78.8	21.2	100.0		
	取り組まなかった	(人)	34	83	117		
		(%)	29.1	70.9	100.0		
小中学生時代継続	取り組んだ	(人)	301	121	422	445	**
		(%)	71.3	28.7	100.0		
	取り組まなかった	(人)	3	20	23		
		(%)	13.0	87.0	100.0		
小中高校生時代継続	取り組んだ	(人)	268	69	337	356	**
		(%)	79.5	20.5	100.0		
	取り組まなかった	(人)	2	17	19		
		(%)	10.5	89.5	100.0		

（2015年度～2020年度合計：除2016年度・除無回答）（**：ｐ＜0.01）

小中高校生時代にＶ体験学習に取り組んだ者のうち新成人になってもＶ活動に取り組んでいる者の割合を各年代別に述べると、小学生時代に取り組んだ者のうち新成人になっても取り組んでいる者は 69.8%、中学生時代に取り組んだ者のうち新成人になっても取り組んでいる者は 71.2%、高校生時代に取り組んだ者のうち新成人になっても取り組んでいる者は 78.8%、小中学生時代に継続して取り組んだ者のうち新成人になっても取り組んでいる者は 71.3%、小中高校生時代に継続して取り組んだ者のうち新成人になっても取り組んでいる者は 79.5%となった。

次に、小学生時代、中学生時代、高校生時代、及び、小中学生時代継続、小中高校生時代継続したＶ体験学習への取組が、新成人のＶ活動と関係するか、それぞれ独立性のχ^2検定を行った。その結果、すべて有意差が認められ（ｐ＜0.01）、小学生時代、中学生時代、高校生時代、小中学生時代及び小中高校生時代継続してのＶ体験学習参加と新成人のＶ活動は、それぞれ有意な正の関係にあり、継続性が認められた。

以上のことから、Ｖ体験学習に取り組んだ年代が上がるにつれて、Ｖ活動に取り組む新成人の割合が高くなっていること、また、小中学校時代にＶ体験学習を行うだけよりも、小中高校生時代を通してＶ体験学習を継続するほうが、新成人になってからのＶ活動の取組率が更に高くなっていることが明らかになった。

1－2　ＦＶＰの有効性

(1) 小中学生時代にＦＶＰは役に立ったか

ＦＶＰは、児童生徒のＶ体験学習への取組のきっかけづくりと意欲を高めて継続につなげることを目的として開発されたものである。

「ＦＶＰは小中学生時代に役に立ったか」の問いに対しては、「小学生時代役に立った」が 390 人（78.5%, 図 3)、「中学生時代役に立った」が 375 人（75.5%, 図 4）であり、ともに 75%を超える高い割合であった。

以上のことから、新成人の多くはＦＶＰの活用の有効性を認めているといえる。

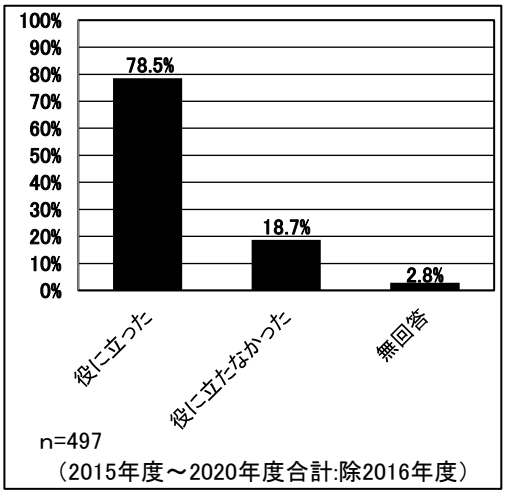


図 3 小学生時代 FVPの有効性

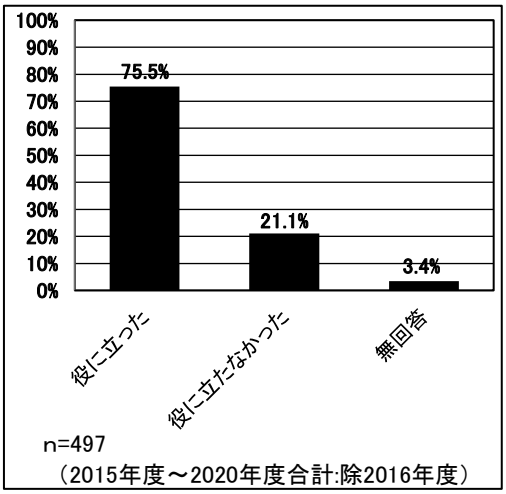


図 4 中学生時代 FVPの有効性

(2) 小中学生時代のＦＶＰ活用の有効性と新成人のＶ活動は関係するか

図 5、図 6 は、小学生時代、中学生時代のＦＶＰ活用の有効性と新成人のＶ活動との関係について、5 年度分を合計してクロス集計したものである。

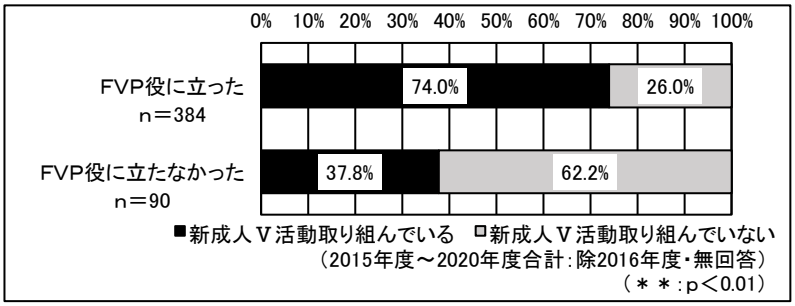


図 5　小学生時代　FVP の有効性と新成人のボランティア活動の関係

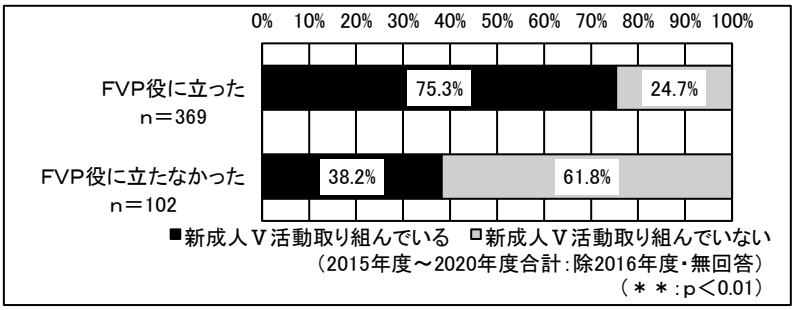


図 6　中学生時代　FVP の有効性と新成人のボランティア活動の関係

その結果、「小学生時代にＦＶＰは役に立った」と回答した新成人のＶ活動取組率は74.0%、「中学生時代にＦＶＰは役に立った」と回答した新成人のＶ活動取組率は 75.3%となり、ともに70%以上のＶ活動取組率であった。

次に、小学生時代のＦＶＰの有効性、中学生時代のＦＶＰの有効性と新成人のＶ活動の関係について、それぞれ独立性のχ²検定を行った結果、ともに有意差が認められ（p＜0.01)、小学生時代、中学生時代のＦＶＰの有効性と新成人のＶ活動はともに有意な正の関係にあることが明らかになった。

以上のことから、小中学生時代のＦＶＰ活用は、新成人のＶ活動への継続性に有効であったと考えることができる。

(3) 小中学生時代のＦＶＰ活用の有効性と「後輩にＶ活動を勧めるか」は関係するか

図 7、図 8 は、小中学生時代のＦＶＰ活用の有効性と「後輩にＶ活動を勧めるか」は関係するかについて、5 年度分を合計してクロス集計をしたものである。

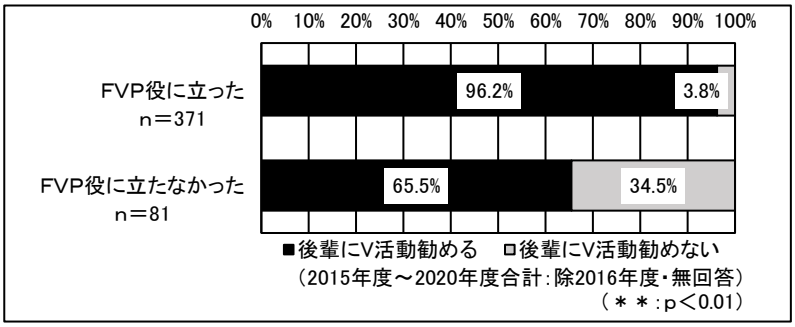


図 7 小学生時代 FVP の有効性と新成人は後輩にボランティア活動を勧めるの関係

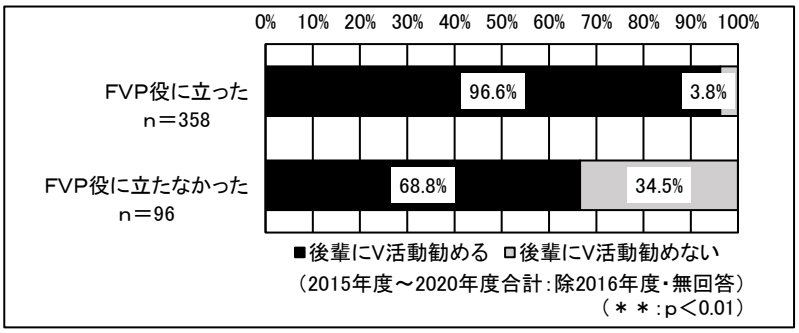


図 8 中学生時代 FVP の有効性と新成人は後輩にボランティア活動を勧めるの関係

その結果、「小学生時代ＦＶＰは役に立った」と回答した新成人がＶ活動を後輩に勧める割合は 96.2%、「中学生時代ＦＶＰは役に立った」と回答した新成人がＶ活動を後輩に勧める割合は 96.6%となり、ともに 96%台の非常に高い割合であった。

次に、小学生時代、中学生時代のＦＶＰ活用の有効性と「Ｖ活動を後輩に勧める」の関係について、それぞれ独立性のχ²検定を行った結果、ともに有意差が認められ（p＜0.01)、小学生時代、中学生時代のＦＶＰの有効性と新成人がＶ活動を後輩に勧めることは有意な正の関係にあることが明らかになった。

以上のことから、小中学生時代のＦＶＰ活用は有効であったと新成人に肯定的に捉えられ、後輩にＶ活動を勧めることにも前向きになっていることが分かる。

2　児童生徒のＦＶＰの感想欄調査（2019 年度）

ＦＶＰは、各年度の終わりにＶ体験学習の感想を感想欄に記録することによって、1 年間の活動の振り返りをするようになっている。表 5（p. 9）のとおり、2019 年度の神埼市の小中学校 10 校の児童生徒数 2,572 人のうち、2,389 人（92.9%）がＦＶＰの感想欄を提出した。その後、当法人に送られてきた児童生徒の感想欄を、共通する内容で仕分けし、表 14 にまとめた。

最も多かった内容は、A. 達成感・自己有用感 50.9%であった。以下、B. 活動への強い意欲 15.7%、C. 気づき・学び 8.0%、D. 地域・人・みんなのため 6.6%、E. ＦＶＰ記載社会貢献活動団体応援 5.4%、F. コミュニケーション・協力・交流 4.5%、G. その他 9.0%の順となり、その他を除いた内容の感想欄の割合は 91.0%であった。

いずれも、児童生徒がＶ体験学習終了後に前向きな感想を持ったことが表われていると思われる。Ｖ体験学習の振り返りとなるＦＶＰの児童生徒の記録及び感想が、学びの定着とともに次なる活動へのきっかけ、動機付け、継続意欲につながっているのではないかと考えられる。

また、後述する 4（4）（p. 24）で教師の記載内容（児童生徒にどのような成長がみられるか）をまとめているが、ＦＶＰを児童生徒の活動の記録と感想欄による振り返りに適切に用いることで、ＦＶＰがＶ体験学習の継続意欲を高めていることも確認できた。

表14　2019年度神埼市FVP感想欄の具体的内容

		A	B	C	D	E	F	G	
内容		達成感・ 自己有用感	活動への 強い意欲	気づき・学び	地域・人・みんなのため	FVP記載社会貢献活動団体応援	コミュニケーション・協力・交流	その他	合計（人）・割合（%）
記載内容を一部簡略化して掲載		・活動に進んで参加することができた。 ・心がすっきりした。 ・とてもすがすがしい気持ちになった。 ・頑張れるようになった。 ・達成感を感じた。 ・人の役に立てることはとてもいいなと思った。 ・世界の人の助けになりたい。など	・来年も積極的に参加していく。 ・来年はもっと参加したい。 ・自分から進んで取り組む。 ・高校では中学校の時より多く頑張りたい。 ・来年も再来年もこの気持ちのままボランティアをしようと思う。など	・人と協力することの大切さや自分から進んで取り組む達成感を学んだ。 ・町の人とのつながりや町をきれいにすることの大切さ。 ・地域の人たちと協力することの大切さを学べた。 ・感謝することが大切だと思った。など	・市全体をきれいにして、みんなが喜ぶ市にしたい。 ・ゴミのない町にしたい。 ・みんなのために頑張りたい。 ・人々のために頑張った。 ・自分の地域をきれいにするため。 ・人の役に立ててよかった。など	・たった一人で、どれだけの人が助かるか実感できた。 ・自然環境を守る。 ・困っている子どたちに送りたい。 ・世界には貧しい人や難病の子どもたちがたくさんいるということが改めて分かった。 ・ワクチンをつくるお金になる。など	・もう少し高齢者の方とふれあいたいと思った。 ・近所の人たちとたくさん交流できた。 ・ボランティアをして、友だちとの接し方が良くなった。 ・クリーン作戦で学んだことは協力だ。 ・人と関わることがもっと好きになった。など	・ボランティア活動の参加内容の記載のみ。 ・今年はできなかったが、来年はやりたい。 ・名前のみ。 ・社会貢献活動団体への応援への〇のみ記載。 ・白紙など。	
小学生	（人）	855	287	105	98	94	66	126	1,631
	（%）	52.4	17.6	6.4	6.0	5.8	4.0	7.7	100.0
中学生	（人）	360	88	86	60	34	42	88	758
	（%）	47.5	11.6	11.3	7.9	4.5	5.5	11.6	100.0
合計	（人）	1,215	375	191	158	128	108	214	2,389
	（%）	50.9	15.7	8.0	6.6	5.4	4.5	9.0	100.0

3　神埼市のＶ体験学習に対する取組姿勢ヒアリング調査（2019 年度）

(1) Ｖ体験学習推進の姿勢

神埼市教育委員会の学校教育担当者に確認したところ、以下の姿勢でＶ体験学習が推進されていることが分かった。

・自主性、社会性が根本である。
・学校や地域が自主的に取り組む。
・地域的な活動で、「奉仕の心」、「気づきの心」を養う。
・道徳教育で「社会に奉仕する」を取り上げるときは、実際にＶ体験学習という体験を加えるようにする。

加えて、神埼市は子どもたちの規範意識を高めるために、2013 年に「神埼市四か条の誓い」として、『一 五恩返しをします（父母・先生・友・地域・自然） 二 礼儀を重んじます 三 きまりを守ります 四 すべてのものに思いやりの心で接します』を定め、神埼市全体で推進している。

以上のことから、神埼市教育委員会は、ＦＶＰを活用したＶ体験学習について、児童生徒に「地域社会に貢献できる市民に成長する効果」を期待し、「神埼市四か条の誓い」の精神を育んだ市民の育成という、「市民づくり」を長期的教育目標にして地域と協力しながら取り組んでいることが明らかになった。

(2) ＦＶＰ活用の効果

ＦＶＰ活用の効果については、下記のような回答が得られた。

・自分がどのようなＶ活動に取り組んだのか、の「見える化」ができる。その結果、いくつ頑張ってみよう、と子どもたちにとって目標になりやすいものである。
・最後に成長というか、一年間を振り返ることができる。今の子は、「何をしたのか」という足跡を残してあげることで、「こんなことができたね」というところから成長していくことができる。そういった面で、非常にありがたいものである。
・子どもたちが喜ぶのは、社会的なボランティアに自分の活動がつながること。うれしそうにＡからＧを選ぶのを楽しそうにしている。自分たちがボランティアをして、それを次のボランティアにつなぐリレーができることを評価している。
・世の中にはこういう社会貢献活動（団体）があるのだ、と子どもたちが知る機会にもなっている。

(3) 教育委員会におけるＦＶＰを活用したＶ体験学習実施の仕組み

ＦＶＰの活用については、教育委員会社会教育課の附属機関であり、行政と教育委員会のメンバーからなる青少年育成市民会議が当法人の窓口になっている。当市では青少年育成市民会議がＦＶＰを作成し、直接各学校に配布するとともに、Ｖ体験学習に当たっては上記の 3. (1) の姿勢のもとに、学校による活動とともに、児童生徒が自主的に活動に取り組むよう、直接各学校のＶ体験学習担当者に伝えている。また、中学生及びその保護者に対しては、各中学校を通して、ＦＶＰ活用の目的、活動方針についての説明プリント配布が行われている。

以上のことから、神埼市全体で組織的にＦＶＰを活用したＶ体験学習の取組が行われており、このこともＶ体験学習の継続性につながっていると思われる。

4　参加 10 校のＶ体験学習推進の体制・活動内容アンケート調査（2019 年度）

各校におけるＶ体験学習の実施状況について、小学校 7 校、中学校 3 校のＶ活動担当教員を対象に記述式アンケート調査を行い、調査結果を「2019 年度神埼市小中学校ボランティア活動調査」として表 15（p. 25）にまとめた。その中から、以下の 4 点について記述する。

(1) 校務分掌への位置付けの有無

小中学校 10 校中 9 校が、Ｖ体験学習を奉仕的活動（ボランティア）、ＪＲＣ活動、ボランティア教育（生徒会厚生委員会）、環境美化部、特別活動等の校務分掌に位置付けている。校務分掌に位置付けていない 1 校では、教務主任が中心となって活動を進めている。

一般的には、人事異動等によりＶ体験学習を推進する教師や管理職が異動することによってＶ体験学習の実施が左右されることも多い。それに対して、神埼市においてはどの学校もＶ体験学習を確実に実施する体制を整えていることが分かった。

(2) Ｖ体験学習の内容

小中学校 10 校全校の取組をみると、神埼市教育委員会の姿勢にみられるように各校の学校内で行われる活動については、各校が自主的にテーマを決めて総合的な学習の時間、特別活動等で実施している。その中で、児童生徒はＦＶＰ活用により、自主的に活動に取り組むよう働きかけが行われている。

地域活動については、神埼市の特徴として、市の全地域で市民によって行われているクリーン作戦（内容や時期は地域によって異なる）に、全小中学校において児童生徒が参加するよう働きかけが行われている。その他、地域におけるＰＴＡの資源回収の手伝いやアルミ缶回収、花植え等にも児童生徒が自発的に参加し、地域の市民と一緒に協力して活動している。

(3) ＦＶＰの効果

①ＦＶＰのＶ体験学習へのきっかけ・動機付けについて

「ＦＶＰがあるので生徒たちに呼びかけやすい」、「振り返りができるので今後のよりよい活動の一助となっている」など、小中学校 10 校中 8 校において、きっかけや動機付けの効果があるとの回答があった。

②ＦＶＰが及ぼす児童生徒のＶ体験学習の継続性について

「達成感を感じている児童は、今後も継続したい思いが強いようだ」、「高学年になるにつれ、Ｖ活動の意識が高まっている」、「ＦＶＰに親や教師から言葉をもらうことで励みになっているようだ」、「ＦＶＰは継続性に効果がある」、「継続的に活動しようという意識が高まった」、「ＦＶＰの活用で児童のＶ活動を可視化することができ、教師は評価しやすくなり、児童は活動を認めてもらうことができ、相乗効果がある」など、小中学校 10 校中 9 校において、継続性に効果があるという回答であった。

③ＦＶＰの教師と児童生徒とのコミュニケーションツールとしての効果について

学校の教員の報告の中には、「ＦＶＰがあることで児童が活動したことをうれしそうに報告してくる」、「年度当初ＦＶＰを用いてＶ活動、ＦＶＰ、具体的な取組方法など説明し、活動に対する意識付けを行っている」、「児童の活動を教師がシールを貼って、価値付け、賞賛することで継続できている」、「ＦＶＰがあるので生徒たちに呼びかけやすい」ということが書かれている。以上のことから、ＦＶＰは児童生徒のＶ体験学習のきっかけや動機付け、継続、教師と児童生徒のコミュニケーションのツールとして、Ｖ体験学習・Ｖ活動継続に触媒的な役割を果たしていたと考える。

(4) Ｖ体験学習により児童生徒にみられる成長の具体的な内容

児童生徒にどのような成長がみられるかの具体的な記載内容を、その内容の多い順から学校数（全 10 校中）とともに列挙すると、以下の枠内のとおりとなった。その内容を多い順に挙げると、自主性、思いやり、社会性、やさしさ、積極性などが挙げられている。このことから、Ｖ体験学習を行うことが、生きていく上で大切な力を養うことにつながっていることが確認できた。

自主性：5 校、思いやり：5 校、社会性：4 校、やさしさ：3 校、積極性：3 校、
責任感：2 校、協調性：2 校、協働力：2 校、企画力：2 校、主体性：1 校、
コミュニケーション力：1 校、課題発見力：1 校、修正力：1 校、勤労の精神：1 校、
美化意識・環境意識：1 校、地域を大切にする気持ち：1 校、自治的態度：1 校など

表15 2019年度神埼市小中学校ボランティア活動調査

（2020.1.17）

No.	学校名／調査項目	A小学校	B小学校	C小学校	D小学校	E小学校	F小学校	G小学校	H中学校	I中学校	J中学校
1	**学校のボランティア活動についての教育方針** （その他、特に指導上重視していること）	・地区、家庭、学校の3者が協力したボランティア活動 神埼地区クリーン作戦（年2回） ・全員参加を目標に啓蒙している。 ・校内ではゴミ拾い、朝掃除など ・主体的、自主的に活動できる児童の育成	・PTAや地域と連携して活動 ・ボランティア活動だが積極的に参加の呼びかけ	・5年生の総合的な学習 「ボランティアについて学ぼう」「募金活動をしよう」などのテーマが設定 ・指導をする上で、周りに目を向けることの大切さや、わずかな協力が大きな助けにつながること、自ら進んで行動することの大切さなどをつかませることを重視	・ボランティア意識を高めるためにボランティア意義などを重視した取組	・児童一人ひとりが、自分から進んで行動する「自主性・主体性」、自分自身の「やってみよう」という気持ちを大切にすることができる	・学校目標「白鳥蘆花に入る」（『次郎物語』） ・学校や地域の人のためになる善い行いを進んで行うことができるとともに、他者との関わりを大切にして、思いやり、信頼し合い、助け合うことのできる子どもを育成。	・特別活動や総合的な学習の中で、地域の伝統や文化、自然とのふれあい、奉仕や勤労などに関わる活動等の体験学習を積極的に取り上げる。 ・「地域へ学ぶ」ことによって、より効果的に目標の達成を図る。	・「時を守り、場を清め、礼を尽くす」こと ・「神対応のできる生徒」	・自ら考え、主体的に行動し、よりよく問題を解決する能力を育む ・青少年赤十字（JRC）を推進。 ・生徒会の目標を、「脊振中学校の生徒としての誇りをもち、気づき・考え・行動できる生徒を目指そう」 ・JRC委員会を中心にボランティア活動に取り組む生徒たちが「気づき、考え、行動できる」ように、支援	・「報恩奉仕」の精神を養う
2	**校務分掌へのボランティア活動の位置付けの有無** （位置付けている学校には○を付けた）	○ ・位置付けている	・特に位置付けはない 教務主任が中心となり活動を進めている。	○ ・JRC担当	○ ・位置付けている	○ ・特別活動	○ ・奉仕的活動（ボランティア）	○ ・位置付けている	○ ・生徒会活動各部委員会の1つ「環境美化部」	○ ・位置付けている	○ ・ボランティア教育 （生徒会厚生委員会）
3	**学校全体で取り組んでいるボランティア活動** （今年度の活動内容。教育課程上の位置付けについてもご記入ください。）	・神埼地区クリーン作戦	・除草作業 （夏期休業中の奉仕活動） ・地区のクリーン作戦 （地域での奉仕活動）	・ユニセフや赤十字社への募金活動	・神埼市の進めるクリーン作戦には参加を推進。 ・PTA活動の廃品回収なども地域のこどもクラブによっては活動を推進している。	・「草取り10本活動」 梅雨から夏にかけて一斉にのびてきた雑草を、登校時や昼休みに取る。6年生の自主的な行動が全校児童に広まる。 ・「学校園のお世話」 学校園の野菜の世話を、全校児童が進んで行う。	・トイレのスリッパ並べやくつ並べ ・ゴミ拾い ・草むしり ・教室内の道具の整理整頓（本・ぞうきん・水筒など） ・アルミ缶回収 ・困っている人の手助け・募金活動 ・あいさつ運動 等 ・特色ある活動や委員会活動に位置づけ	環境ボランティア委員会 ・「エコキャップ運動」 ペットボトルキャップ集めを全校に呼びかける。 ・全校の花壇の整備や校内美化活動 ・PTA主催の除草作業 夏休みに開催。全校児童と家庭が参加	神埼市クリーン活動（第1回・第2回）	○学校行事 ・VS脊振山登山（下山時に清掃活動） ・脊振学園との花植え活動 ・VSプール清掃（地域のプールを清掃） ・そよかぜ荘（高齢者生活福祉センター）訪問 清掃活動と利用者の方々と交流活動 ・独居老人の方々を文化発表会へ招待。 ・独居老人の方々、中国の姉妹校に年賀状送付 ○年間を通しての取り組み ペットボトルキャップの回収（ワクチン寄付のため）	・お年寄りへの暑中お見舞い葉書 ・お年寄りへの年賀状葉書 ・クリーン作戦参加（2回）【地域】 ・JRC登録 ・アルミ缶回収 ・ペットボトルキャップ回収 ・チャリティー街頭募金【夏休み】 ・熊本災害義援金募金
4	**学年単位で取り組んでいるボランティア活動** （教育課程上の位置付け）	・3年生　クリーン作戦 ・6年生　朝の校内清掃	・特になし	・5年生の総合の時間 「ちょこっとボランティア」 歓迎遠足に併せ、地域のゴミ拾いをする。 「募金活動」 支援したい活動や団体を事前に調べてまとめ、地域の文化祭に併せて募金活動を行う。 （教育課程での位置づけあり） ・2・3年生 地域の落書きを消す活動 （本校は全学年単学級）	・特になし	・「校内清掃」 登校してから朝の会が始まるまでの時間に、玄関、中庭、階段などの掃除、草取り、落ち葉掃きを毎日続けた。（6年生） ・「集会準備、後片付け」 各朝会、集会の前後には体育館にモップをかけ、下級生が気持ちよく入場することができた。（6年生） ・「宿泊学習中のゴミ拾い」 施設内だけでなく、ゴミ拾いをしながらフィールドビンゴを行った。（5年生） ・老人ホーム訪問（4年生） ボランティア活動は学年単位 ・児童数が少ないため	・4年生と5年生「子ども学芸員」 春と秋の「九年庵一般公開」の期間に、来訪者に伊東玄朴の業績紹介。 そのための準備を総合的な学習の時間に「ふるさと学習」として取り組む。	－	○1年生 総合的な学習の時間 ・障害者支援施設（脊振学園）を訪問 芋苗植えと収穫を年2回実施。	
5	**各クラス単位で取り組んでいるボランティア活動（含授業）** （教育課程上の位置付け）	特別支援学級　自立活動 児童が校内の清掃除やゴミ拾い。	・特になし		・なし				－	・全校で活動することが多い。 小規模（各学年20名以下の1クラスずつ）のため。	・なし
6	**放課後のボランティア活動** （教育課程上の位置付け）	・特になし	・特になし	・特になし	・特になし	・特になし	・特になし	・特になし	・特になし	・特になし	・特になし
7	**地域でのボランティア活動** （学校が児童生徒に参加を働きかけているものがありましたら、時期と活動内容をお教えください。教育課程上、位置付けておられる場合は位置付け）	・神埼地区クリーン作戦	・8月　除草作業 （夏期休業中の奉仕活動） ・6月，10月の地区のクリーン作戦 （地域での奉仕活動）	・「神埼市クリーン作戦」 積極的な参加の呼びかけ	・神埼クリーン作戦 参加推奨（年2回実施）	・神埼市クリーン作戦 ・PTA資源物回収事業 ・地区の清掃活動（地区児童会で声かけ）	・市のクリーン作戦 （5月、11月の2回） ・アルミ缶拾い ・神社やお宮そうじ ・廃品回収 ・子供クラブでの奉仕活動等。	・神埼市クリーン作戦 （年に2回、6月と10月） 子どもと保護者に参加を呼びかけ 教育課程上の位置づけはない。	□ ・神埼市クリーン活動（第1回・第2回）	・神埼市クリーン作戦 ・フラワーロードの花植え （町内歩道への設置） ・フラワーポットの花植え （町内老人宅への設置）	・6月　クリーン作戦 ・11月クリーン作戦
8	**児童生徒が地域で自発的に行っているボランティア活動**	・神埼地区クリーン作戦 ・ゴミ拾い、川掃除、花いっぱい運動 （推進している地区があり、そこでは美化意識や環境意識が高まっていると言う）	・特になし	・落ちているゴミを拾う 外遊びの際に、落ちているゴミに気づき、拾っている児童が数名いる。そのような児童は、落ちているゴミの種類に関心を寄せているようである。	・把握せず	・地区の清掃活動	・特になし	・把握せず	－	○年に2回商業施設での募金活動 ・24チャリティー募金活動（8月） ・赤い羽根募金活動（10月） ○個人的にレジ袋を持ち歩き、地域に落ちているゴミを拾っている生徒がいる。	・特になし
9	**FVPの効果** （教師の指導上の効果や児童生徒にとっての効果）	**1）ボランティア活動のきっかけ・動機づけについて**	・ボランティア活動の意味を理解することができる。 ・動機づけとなっている。	・活動をする際にFVPを持参するようにしているので、意識付けや意識の向上につながっていると感じる。	・ボランティア活動をするきっかけとして有効であると考える。 ・活動したことを嬉しそうに報告してくるので、ボランティアパスポートはボランティアをするためによい動機づけになっているようだ。	・活動記録が残るのでボランティアのきっかけにはなっている。	・「ボランティア活動」、「ボランティアパスポート」、「具体的な取り組みの仕方」などについての説明を年度当初に児童に対して行い、活動に対する意識付けを行っている。 ・「ボランティアパスポート」を活用して児童のボランティア活動を可視化することで、教師は評価しやすくなり、児童は活動を認めてもらうことができ相乗効果があると考える。 ・また、地区の清掃活動など地域の活動にも積極的に参加しようという意識につながっていると思う。 ・神埼市で行われているクリーン作戦や除草作業などへの参加率はおおむね高いといえる。「ボランティアパスポート」を使うことで、ボランティア活動に対する意欲付けになっている。	・年度当初、児童の年間目標1人1冊としている。	・ボランティアパスポートは、とても取り組みやすい活動であり、ボランティアをより身近に感じることができるようになった。 ・また、ボランティアを知るきっかけとなっている。	・パスポートについては、小学校でも取り組んであるので慣れ親しんでいるようだ。	・様々な活動を経て、昨年度よりさらに良い活動にしようとする生徒たちの意欲が感じられた。 ・また、1年間を通しての活動を「ボランティアを終えて」の欄でふり返ることで、今後のより良いボランティア活動につなげる一助となっている。	・神埼市よりふれあいパスポートが配布され、厚生委員会の取り組みとして利用している。 ・ふれあいパスポートがあるので、生徒たちに呼びかけやすい
		2）児童生徒のボランティア活動の継続性について	・1年生からボランティアパスポートを活用しているので、高学年になるにつれてボランティア活動の意識が高まっている。	・ボランティアを終えて感想を書いたり寄付先を選んだりすることができるので、達成感を感じている児童は今後も継続したい思いが強いようだ。	・継続して取り組んでいるので、継続性に対する効果もあると考える。	・小学年の高学年になると休日のボランティア活動が社会体育などと重なって参加できないという声が聞かれる。 ・ボランティアをしたいけど社会体育など習い事が優先されているようである。	・ボランティアパスポートの活用により、取り組みへの参加意欲が高まると同時に、継続的に活動しようという意識が児童の中に高まった。 ・さらに、本校の6年生は、毎年自ら進んで様々なボランティア活動に取り組んでいる。その自主的活動が、他の学年のよい手本となり、下学年児童がまねをすることでボランティア活動が伝統的に続いている。	・児童の活動を教師がシールを貼って、価値付け、賞賛することで継続できる。 ・また、児童の活動を数として児童が認識できている。	・ボランティアパスポートがあることで、いくつかの活動については、毎年同じ時期にボランティアに取り組むことを意識させることができている。 ・また、ボランティアパスポートに親や教師からサインや言葉をもらうことで、励みになっているようだ。	・成長するにつれて、参加の度合いは低くなっているようだ。 ただし、意識と行動は継続しているようだ。	・1年間を通しての活動を「ボランティアを終えて」の欄でふり返ることで、翌年の活動をさらによくするために、生徒会を中心に考える機会となっている。	・生徒会の活動としているので、このまま続けていく。
		3）その他	－	－	－	－	・ボランティアパスポートに加え、今年度から行っている「ほめほめ活動」で、児童のよい行動を価値づけし、放送で紹介したことで、よい行動を真似して行う児童が増え、ボランティア意識が自然と広がっていった。 ・特に、「草取り10本活動」は6年生が呼びかけたことで、高学年が手本となり、全校児童が自主的に取り組むことができていた。	－	－	－	・学校だよりで、ボランティア活動の啓発に活用。	－
10	**児童・生徒がボランティア活動をすることで、どのような成長がみられると考えているか。**	・自主性、社会性の成長が見られる。 ・自分たちの町をきれいにしたいという美化意識、環境意識の向上が見られる。	・地域の方や保護者と一緒に活動することで、社会性や協調性が身に付くと思う。 ・個別の奉仕活動では、自主性や勤労の精神、相手の立場を考える力が育つのではと感じている。	・5年生の、ボランティア活動に対する振り返りで「ボランティアを身近に感じるようになった」「小さな活動が人の命を救うことにもつながる」などの感想が多く見られた。 ・困っている人や状況に気づき、自ら関わろうとする態度が育成されたと感じる。 ・問題に気づき、その問題の解決に向けての取り組みを企画したり、企画が効果的に実施されるように考えたりするので、課題発見力や、企画力、修正力が身に付くと考えている。	・協働力、忍耐力、思いやり、やさしさは育っていくと考えられます。 ・しかし、成長と共に学業が優先されて活動できない状況もあるように考えられる。	・活動を通し、自主性、主体性だけでなく、他者を思いやる気持ちが育っていると感じた。 （ボランティア活動の感想文の中に「誰かのために活動することが、自分の喜びになる」という感想をもつ児童がいた。）	・自主（発）性 ・社会性 ・責任感 ・積極性 ・思いやり ・やさしさ	・社会性（地域との交流） ・協調性 ・責任感 ・積極性 ・企画力 ・コミュニケーション能力	・地域を思う気持ち、大切にする気持ちが育まれているようだ。	・学校周辺の清掃活動を始め、募金活動、エコキャップ回収運動など、JRC委員会を中心に生徒達が自主的に計画をし、実行している行事が多くなり、ボランティアに対する意識の高まりを強く感じている。 ・また、様々な行事の中で、上級生が下級生に教えながら活動を進めており、生徒の自発的・自治的な態度が育ち受け継がれている。	・協働力 ・思いやり ・やさしさ

Ⅳ　まとめと考察

本調査の目的は、冒頭に述べたとおり、長期間にわたりＦＶＰを活用したＶ体験学習の推進に取り組んでこられた佐賀県神埼市の協力を得て、その継続的な取組の効果を分析することであった。そのために、4 つの調査（A.新成人ＶＡ調査、B.児童生徒のＦＶＰ感想欄調査、C.神埼市のＶ体験学習に対する取組姿勢ヒアリング調査、D.参加 10 校のＶ体験学習推進の体制・活動内容アンケート調査：ここでは4調査にA、B、C、Dと符号を付ける）を行った。その結果、Ｖ体験学習におけるＦＶＰ活用の効果について、下記のとおり検証することができた。

1　Ｖ体験学習におけるＦＶＰ活用の効果

(1) ＦＶＰを活用した継続的なＶ体験学習の効果

調査Ａの調査結果から、次のような効果を確認することができた。

①新成人のＶ活動・Ｖ体験学習取組率が高い

・新成人の 5 年度分合計のＶ活動・Ｖ体験学習取組率は 65.6%と高く、新成人（全体、学生、社会人）のＶ活動取組率は、同年代を対象にした大学生アンケート調査や社会生活基本調査の取組率と比べて非常に高い。

②Ｖ体験学習を継続するほど新成人のＶ活動・Ｖ体験学習取組率が高くなる

・新成人のＶ活動・Ｖ体験学習取組率は、小中学生時代にＶ体験学習に継続的に取り組んだ児童生徒は 71.3%、さらに高校生時代まで継続した生徒は 79.5%と、Ｖ体験学習を継続するほど上がっていく。

③小学生時代からＶ活動・Ｖ体験学習を継続している新成人は、Ｖ活動・Ｖ体験学習を後輩に強く勧める傾向がある

・小中高校生時代、新成人と、Ｖ活動・Ｖ体験学習に継続して取り組んでいる新成人はＶ活動・Ｖ体験学習を後輩に勧める傾向が強い（92.5%）。

(2) ＦＶＰ活用の効果の要因

(1) で述べたように、ＦＶＰによるＶ体験学習の経験がある新成人は、Ｖ活動・Ｖ体験学習に取り組む傾向が強い。しかも、そうした傾向をもつ新成人は、Ｖ活動・Ｖ体験学習を後輩に勧めるという意識が強い。つまり、ＦＶＰは若者のＶ活動の実施や意識にプラスの影響をもつことがうかがわれる。なぜ、このような効果が生まれるのだろうか。B、C、Dの調査結果から下記が要因となっていると考えられる。

①Ｖ体験学習の「見える化」

・目標を立てやすく、活動を記録できる（調査C、Dより）。

・１年の振り返りができ、児童生徒が自ら成長を確認できる（調査C、Dより）。

②他の社会貢献活動への発展（自己有用感の触発）

・ＦＶＰに記載の社会貢献活動団体への応援を通じて、より広い社会のボランティア活動と自分がつながる（調査B、Cより）。これは、子どもたちの自己有用感を触発するものである。

③コミュニケーションの活発化

・Ｖ体験学習の取組の説明や意識付け、Ｖ体験学習の実施の際に、ＦＶＰがあると呼びかけやすい（調査Ｄより）。

・児童が活動内容をうれしそうに教師に報告してくる（調査Ｄより）。

④Ｖ体験学習への意欲・動機付け

・①Ｖ体験学習の「見える化」の効果により、活動への意欲が高まり、動機付けになり、学びの定着とＶ体験学習への継続意欲を高める（調査Ｃ、Ｄより）。

・児童生徒の感想欄においては、多い順に達成感、自己有用感、活動への強い意欲、気づき、学び、地域や人やみんなのため、更なる社会貢献活動への意欲、コミュニケーション、協力、交流などの感想が多い（調査Ｂより）。

2　ＦＶＰによるＶ体験学習のメカニズム

１によれば、20 歳になってもＶ活動・Ｖ体験学習への前向きな姿勢が維持されることの要因の一つは、Ｖ体験学習への意欲・動機付けの強さであった。そこで次に、このような意欲・動機付けはどのようなメカニズムで強化されるのかを考察する。

①学習意欲向上モデル

調査Ｃ、Ｄからの「ＦＶＰ活用の効果」の具体的なコメントを図９にまとめてみると、教育心理学者ジョン・ケラーの学習意欲向上モデル（ＡＲＣＳモデル）にある４つの側面を満たしていることが確認された。

「Attention（注意）」：＜面白そう。もっと知りたい＞
- ・ＦＶＰを用いて年度の取組の説明、事例紹介を行う。
- ・ＦＶＰがあるので呼びかけやすい。

↓

「Relevance（関連性）」：＜親しみがある。やりがいがある＞
- ・活動をいくつやってみよう、と自分で目標を持てる。
- ・自分の活動が社会的なボランティアにつながる。

↓

「Confidence（自信）」：＜やればできる。ここまでできるようになった＞
- ・児童が活動したことをうれしそうに報告してくる。
- ・１年生からＦＶＰを活用しているので、高学年になるにつれてＶ活動の意識が高まっている。

↓

「Satisfaction（満足感）」：＜やってよかった。もっと学習したい＞
- ・ＦＶＰを通じて親や教師から言葉をもらうことが励みになっている。
- ・自分の活動が社会貢献につながる。「振り返りができるので、満足感を感じ、今後のよりよい活動の一助になっている。

図９　ARCSモデルを満たす FVP を活用した V 体験学習（調査C、Dコメントから）

教育心理学者ジョン・ケラーの学習意欲向上モデル（ＡＲＣＳモデル）[注 1] とは、指導する側が取るべき行動の 4 つの側面「Attention（注意）」「Relevance（関連性）」「Confidence（自信）」「Satisfaction（満足感）」を満たすことで学習意欲を高めるという、指導する側の枠組みを示すモデルである。ＦＶＰを活用することでＶ体験学習に対する児童・生徒自身の学習動機（学習意欲、学習の継続意欲）を高めていることを確認するものである。

（注 1）鈴木克明監修、市川尚・根本淳子編著『インストラクショナルデザインの道具箱 101』北王子書房、pp. 10-19 を参考に表記を一部変えている。

上記のことから、神埼市のＶ体験学習においては、ＦＶＰを活用することで注意、関連性、自信、満足感という４つの側面を踏まえた児童生徒の活動への指導が行われ、児童生徒の学習意欲が高められているものと考えられる。

②経験学習モデル

ＦＶＰ活用の効果を踏まえると、「Ｖ体験学習から得た経験⇒活動記録欄・感想欄への記録による振り返り⇒Ｖ体験学習や社会貢献活動から得られた学びの概念化⇒よりよい新たなＶ体験学習への挑戦（次回はもっと○○をしてみよう）」（図 10）というサイクルを繰り返し回すことにより、学習成果が身についていくものと思われる。これは、単純に経験をすれば学習になるというものではなく、経験の中で得たものをマイセオリーとして構築し、それを次の機会に生かしてよりよい活動を行っていくことでさらに学習が発展するという組織行動学者デービッド・コルブの経験学習モデル（図 11）(注 2) のプロセスに対応している。神埼市ではＶ体験学習の継続により、小中学校在学９年の間、繰り返し行われてきた。

（注 2）鈴木克明監修、前掲載書、pp. 48-49 を参考に表記を一部変えている。

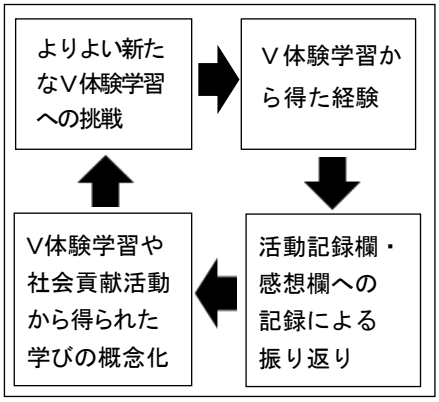


図 10　ＦＶＰのＶ体験学習の流れ

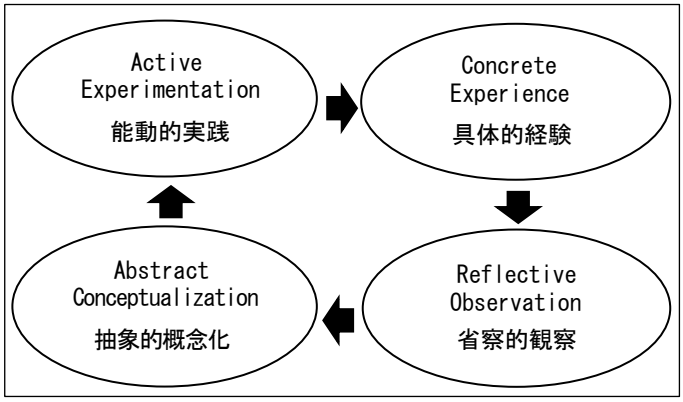


図 11　デービッド･コルブの経験学習モデル

以上から、ＦＶＰはＶ体験学習において学習意欲向上モデル（ＡＲＣＳモデル）と経験学習モデルを有効に機能させることができるツールであると考えられる。このことは、Ｖ体験学習の中でＦＶＰによる外発的動機付けが児童生徒自身の内発的動機付けへと転換しているともいえよう。その結果、１でみたとおり、神埼市では小中学校卒業後も、高校生時代のＶ体験学習、新成人のＶ活動・Ｖ体験学習が継続しており、20 歳時においてもＶ活動・Ｖ体験学習への取組率が高くなっているものと考えられる。

3　なぜ効果が高まるのか　―神埼市における取組の特長―

１(2)で述べたとおり、ＦＶＰの活用はＶ体験学習を「見える化」するとともに自己有用感を高め、子どもたちと教師とのコミュニケーションを活発化する。それらがＶ体験学習の意欲・動機付けにつながり、成人になってからのＶ活動・Ｖ体験学習に影響を及ぼすものと考えられる。こうした因果関係は、神埼市におけるＦＶＰ活用の特長によって促進されている。それらの特長としては、調査Ｃ、Ｄより下記の諸点をあげることができる（①②は調査Ｃ、③は調査Ｃ、Ｄ、④⑤⑥は調査Ｄより）。

①Ｖ体験学習を「市民づくり」という長期的な教育目標の一環に位置付けている。

・神埼市教育委員会は、自主性、主体性を根本に置いてＶ体験学習を進め、学校や地域が自主的に取り組む姿勢で臨んでおり、「市民づくり」という長期的な教育目標の一環に位置付けている。

②青少年育成市民会議が継続的にＦＶＰ活用を支援、推進している。

・青少年育成市民会議が、教育委員会、学校、保護者（地域）のネットワークの中心になって、継続的にＦＶＰ活用を支援、推進している。

・青少年育成市民会議から、クリーン作戦実施の際は地域の人々に積極的に児童・生徒に声掛けをしてもらうように伝えており、教育行政と市民の共通認識ができている。

③家庭・地域がＦＶＰを活用したＶ体験学習に協力、多様な地域活動に児童生徒を受け入れている。

・すべての地域（校区）で、クリーン作戦が実施されるともに、多様な地域活動に児童生徒が自主的に参加している。家庭・地域がＦＶＰを活用したＶ体験学習に協力的である。

④学校がＶ体験学習を校務分掌に位置付けている。

・学校においては、概ねＶ体験学習の担当を校務分掌に位置付けている。

⑤ＦＶＰの特色である「活動⇒記録⇒感想（振り返り）⇒社会貢献」の流れを、学校、教師がＶ体験学習に適切に活用している（以下、主なものを例示）。

・「ボランティア活動」「ボランティアパスポート」「具体的な取組の仕方」などについての説明を年度当初に児童に行っている。

・活動をする際にＦＶＰを持参するようにしているので、意識付けや意識の向上につながっていると感じる。

・１年間の活動をＦＶＰの「ボランティアを終えて」の欄で振り返ることで、今後のよりよいボランティア活動につなげる一助となっている。

⑥教師が児童生徒とのコミュニケーションツールとして活用している（以下、主なものを例示）。

・親や教師からサインや言葉をもらうことで、励みになっている。

・児童の活動を教師がシールを貼って、価値付け、賞賛することで継続できる。

・ＦＶＰがあるので、生徒たちに呼びかけやすい。

・児童が活動したことをうれしそうに報告してくる。

当法人では、ＦＶＰの申込みの単位を原則として学校、団体としている。その中で、実際の申込みは、教育機関、団体というよりはＶ体験学習が必要だと考える担当者個人（教師や指導者）からの連絡が多い。このような場合、年度が変わりその教師や指導者が異動・退職するとＦＶＰの活用が不活発になるというケースもみられた。その点、神埼市においては 2006 年度から 15 年以上、ＦＶＰを活用したＶ体験学習を実施している。上記のうち①～④は、こうした継続性を実現させるための条件ともなっている。

以上のように、神埼市においては教育委員会と学校における努力と地域の共通理解・協力によって、ＦＶＰを活用したＶ体験学習が安定的、継続的に実施されている。そして新成人の高いＶ活動・Ｖ体験学習取組率は、このような教育委員会、学校、地域の前向きな取組の成果として実現しているのである。

おわりに

長期間にわたる本調査より、神埼市で継続的なボランティア体験学習に取り組んだふれあいボランティアパスポートの経験者は成人してからもボランティア活動・ボランティア体験学習取組率が高いことが分かった。その背景には教育委員会や地域全体の支えがあるということも確認できた。また、教師や指導者がふれあいボランティアパスポートの機能を理解し適切に活用、指導することで、ボランティア体験学習に対する児童・生徒自身の学習動機（学習意欲、学習の継続意欲）を高める効果があることが分かった。

ＡＩ、ＶＲ（ヴァーチャル・リアリティ）など更に技術革新が進み、大きく変化する社会のなかで、これからの子どもたちには自分や自分たちを取り巻く様々な社会の課題に向き合い、解決し、よりよい生き方、社会づくりをしていく力、すなわち「自助力」（自ら意欲をもって生きていこうとする力）と「共助力」（みんなで助け合って生きていこうとする力）が求められる。

ボランティア体験学習は、児童生徒が「自助力」と「共助力」を育むために有効な取組である。そして、ふれあいボランティアパスポートはボランティア体験学習のきっかけや動機付け、コミュニケーションの活発化、個の活動を社会につなぐ機能を持ち、児童生徒自らが意欲をもって活動を継続させ学びを身につけることを助けるツールである。

ぜひ、学校や教育委員会、社会教育関係団体の皆様には、ボランティア体験学習に取り組まれ、児童生徒にとって魅力的なボランティア体験学習の一助に「ふれあいボランティアパスポート」をご活用いただければ幸いである。

（資料１）神埼市新成人ボランティア活動アンケート調査用紙

認定NPO法人
さわやか青少年センター

神埼市新成人ボランティア活動実施状況調査（アンケート調査）

皆様、ご成人おめでとうございます。皆様には、小学生、中学生の時、「ふれあいボランティアパスポート」を使ったボランティア活動に取り組んでいただき、ありがとうございました。当時のボランティア活動の取組状況、及び、その後の状況について、ボランティア活動実施状況調査を行っています。以下のアンケートにご回答下さい。ご協力をお願いいたします。

いずれかの番号に○を付けて下さい。

1-1 性別　① 男性　② 女性

1-2 現在の職業（１つ○をつける）　① 学生　② 自営業　③ 会社・行政等勤務　④ 無職　⑤ その他

2-1 小学生当時、あなたはボランティア活動にどのように取り組んでいましたか。（１つ○をつける）

① 積極的に取り組んでいた　② まあまあ取り組んでいた　③ 少し取り組んでいた　④ 取り組まなかった

2-2 そのとき、「ふれあいボランティアパスポート」は役に立ちましたか。（１つ○をつける）

① 大変役に立った　② まあまあ役に立った　③ 役に立たなかった

3-1 中学生当時、あなたはボランティア活動にどのように取り組んでいました。（１つ○をつける）

① 積極的に取り組んでいた　② まあまあ取り組んでいた　③ 少し取り組んでいた　④ 取り組まなかった

3-2 そのとき、「ふれあいボランティアパスポート」は役に立ちましたか。（１つ○をつける）

① 大変役に立った　② まあまあ役に立った　③ 役に立たなかった

4-1 高校生当時、あなたはボランティア活動にどのように取り組んでいましたか。（１つ○をつける）

① 積極的に取り組んでいた　② まあまあ取り組んでいた　③ 少し取り組んでいた　④ 取り組まなかった

4-2 その理由をいずれかに○をつけてください。（いくつ○をつけてもよい）

① 学校が積極的に取り組んでいたから　② 学校がたまに取り組んでいたから
③ 学校の単位になったから　④ 入試に向けて良い評価を得られるから
⑤ 先生や親・地域の人に勧められたから　⑥ 社会の役に立つから
⑦ 自分のためになるから
⑧ 「ふれあいボランティアパスポート」のようなやる気の出るツールがあったから
⑨ 学校が取り組んでいなかったから　⑩ 興味がなくなったから
⑪ 「ふれあいボランティアパスポート」のようなやる気の出るツールがなかったから

5-1 現在、あなたはボランティア活動にどのように取り組んでいますか。（１つ○をつける）

① 積極的に取り組んでいる　② まあまあ取り組んでいる　③ 少し取り組んでいる　④ 取り組んでいない

5-2 その理由をいずれかに○をつけてください。（いくつ○をつけてもよい）

① 学校・会社が積極的に取り組んでいるから　② 学校・会社がたまに取り組んでいるから
③ 先生や親・地域の人に勧められたから　④ 小･中･高等学校の時に取り組んでいたから
⑤ 社会の役に立つから　⑥ 自分のためになるから
⑦ 「ふれあいボランティアパスポート」のようなやる気の出るツールがあるから
⑧ 学校・会社が取り組んでいないから　⑨ 興味がなくなったから
⑩ 「ふれあいボランティアパスポート」のようなやる気の出るツールがないから

5-3　5-1 で①～③を選んだ方は、どのようなボランティア活動に取り組んでいますか。（いくつ○をつけてもよい）

① 環境　② 被災地現場　③ 障がい児者　④ 高齢者　⑤ 青少年(遊び･学習)　⑥ 国際支援　⑦ 募金活動
⑧ 寄付　⑨ その他

6-1 後輩の世代にボランティア活動を勧めたいと思いますか。（１つ○をつける）

① 積極的に勧めたい　② 少し勧めたい　③ あまり勧めたくない　④ 全く勧めない

◎ありがとうございました。このアンケート調査は、ふれあいボランティアパスポート事業以外には使用いたしません。

［参考資料］

ふれあいボランティア活動感想文

当法人では、毎年度、ＦＶＰに参加している学校・団体の児童生徒を対象にして、「ふれあいボランティア活動感想文」を募集しています。その目的は、児童生徒の皆さんがＦＶＰを活用して「ボランティア体験学習」に取り組んだ後に感想文を書くことで、その活動を振り返り、自らの学びや成長、今後に向けての意思を確認する機会としていただくことです。

毎年度、応募された感想文は、選考委員による審査により、ふれあいボランティア活動大賞、小学生賞、中学生賞、高校生賞の各賞が決定され、選考委員の講評とともに、「ふれあいボランティア活動感想文集」として参加の学校・団体等に配布しています。

これまでに、当法人設立の平成 24 年度から令和 3 年度まで、各年度（計 10 回）感想文集を発行してきました。ここでは、これまで感想文集に掲載した感想文の中から、小学生、中学生、高校生の 13 作品を掲載しています。（児童生徒の原文に従って掲載しています。）

［小学生］

＜平成 28 年度小学生賞＞

子どもかいのはなうえ

鹿児島県南九州市立中福良小学校１年生

土よう日、わたしたちのさこせと山の子どもかいは、こうみんかんのはなうえをしました。マリーゴールドとチューリップです。

ポットのうらのまるいおしりをきゅっと手でおすと、土といっしょになえがでてきました。はじめにあけておいたあなに、1 こずつうえていきました。上にすこし土をかぶせて、やさしくトントンとしました。それからさいごに水をかけました。水といっしょに、

「はやくさいてね。」

と、こえもかけました。みんなは、はなしもしないで、しんけんにしていました。チューリップは、三かくのお山のようなきゅうこんを 1 こずつ、土の中にうめました。ひとり 3 つずつ、ていねいにうえました。どんなはながさくのかなあ。

はなうえは、9 じからはじまって 11 じにおわりました。手がまっくろくろすけみたいになりました。

はなうえのあとは、そうじです。ぬれたぞうきんで、中からまどをふくと、だんだんそとがきれいに見えてきました。きゅっきゅっと音がして、ぴかぴかになりました。

でも、まどわくのところに、くものすがあったので、それは、ほうきで、シュシュッととりました。

そうじがおわって、みんながあつまると、けいとくんのおかあさんが

「みんな、じょうずにできました。ごくろうさまでした。」

といいました。つかれたけど、きれいになってよかったです。

＜平成 30 年度小学生賞＞

ほいくえんほうもん

青森県弘前市岩木児童センター　小学校３年生

わたしは、おおうらほいくえんに行きました。みんなに、かみしばいを読んであげたらみんなが、おもしろくてわらっていました。わたしはうれしくて、もう 1 回みんなの前でかみしばいをやりたいと思いました。

その理由は、みんながおもしろくてわらってくれるからです。

ボランティアサークルは、毎年あって、ほいくえんほうもんもあります。

わたしは、2 年生からボランティアサークルをはじめました。2 年生のころは、はずかしくてみんなをえがおにすることがあまりできなかったけど、今、3 年生になったら、みんなの前でできるようになって、たのしくなったので、ボランティアサークルが大すきになりました。

わたしは、みんなをえがおにすることが大事だと思いました。理由は、ボランティアサークルは、みんなをえがおにすることができるサークルにしたいからです。

ピノカーサのしせついもんがおわったあとおばあちゃんおじいちゃんが、
「これからもボランティアサークルをがんばってね。」
と言ってくれてうれしかったです。
わたしは、みんながよろこんでくれてやってよかったなと思いました。来年は、4 年生になります。4年生になってがんばりたいことは、来年の2年生に、ボランティアサークルは、こうゆうのだよっておしえることをがんばりたいです。

＜平成 24 年度小学生賞＞

ボランティア活動をして

宮城県仙台市立七北田小学校４年生

ぼくは、4 年生になって「おはようデー」に参加するようになりました。3 年生の時は外遊びしか考えずに参加しませんでしたが、初めてみんなであいさつをしてみると何だか気持ちよくなります。（ボランティアって楽しいな。）ぼくはいろいろなことをやってみようと思いました。
2 年生の給食ワゴンを運びました。当番でないときも運ぶことにしました。1 年生の給食の片付けも手伝いました。先生が
「ありがとう、さすが 4 年生だね。」
と声をかけてくれました。地域では、お年寄りの荷物を持ってあげました。重たかったけど、がんばろうと思ったら力がわいてきました。道を教えました。ぼくが知っているところだったので、付いていってあげることにしました。地域の草取りも手伝いました。町内会長さんといっしょにがんばってやりました。軍手がなかったため、手が切れたりしていたかったです。自分ができることを見つけてやっていたら、ボランティアの数が 42 回になりました。60 回以上やることが、今のぼくの目標です。
ぼくは、ボランティアをして人の力になれるのはすごくいいことだと思います。いつもの力ではなく、何かかくされた力が出るのがすごいです。これからもボランティアを続けていって、地域や学校を元気にしたいと思います。

＜平成 28 年度小学生賞＞

高取ホタルのいる町計画について

福岡県大牟田市立高取小学校５年生

ぼくは今、クラスの皆で高取校区中に、多くの「ごみ」が落ちていることや校区の中にある「長溝川」がよごれていて、ホタルが、住めなくなっていることから、「高取ホタルのいる町計画」を行うことにしました。
取組の 1 つ目として、校区内のごみ調査をしました。結果としては、大人でも、子供としても両方が捨てたと思われるごみが多く落ちていました。取組の 2 つ目として、全

校児童で校区中のごみを拾う、「拾って集めるごみ活動」という活動を行いました。そこでは、燃える燃えないごみが袋に合計3袋くらい集まったかと思います。

しかし、ここで終わってしまうとまたごみの落ちている町にもどってしまうということから学校への登校中にごみを拾ってきてもらうことにして、全校児童へ、5 年生から呼びかけました。すると全校児童の人達がだんだん自分たちから拾ってくれるようになりました。皆が拾って来てくれてるのを見るために、先生が自分たちの各委員会の当番日を聞き、それにかぶらないようにして、ごみ当番というものをつくりました。どのくらい日にちがたったことか、どのくらいかたつと皆がごみがないといって拾って来なくなりました。そこで 2 回目の調査したところまだごみは少しありました。そこで「感謝状」をつくって 1 週間の中で一番多くごみを拾って来てくれた学年に感謝状を渡すことになりました。

これからもずっと続け町をきれいにしていこうと思います。また、ぼく達 5 年生が卒業していくまでに達成できなかった分は次の世代へとつなげたいと思います。

＜平成29年度小学生賞＞

ボランティア活動を通じての私の成長

千葉県栄町立安食台小学校５年生

ぼくは、ボランティア活動を通じて、初めに考えた事は、この地域には身近な活動がたくさんあるけれど、小学生のぼく達にでも小さな活動をしたら、大きなボランティアになると思いました。

ぼくは今小学 5 年生です。今の自分が精いっぱいできるボランティアはなんだろうとなやみましたが、まず生活しているこの地域の一人として、みんなのためになるような活動からぜひやってみたいと思いました。

そこで自たく周辺にある道路のカーブミラーをみがくことにしました。カーブミラーが曲がっていたり、ひどくよごれていると、車を運転する人々や自転車に乗る人たちは、大きな事こやけがになることも予想されます。だから少しのよごれでも落とし、きれいにしたり、ミラーの角度を直したりするだけで、ぼくたちやみんなの交通安全につながると思いました。

そして古くなりき険なミラーなどを見つけた時には役場の方々に連らくを入れることもいいと思いました。

「ボランティア」と聞くと災害ふっこうしえんの方々を思いだし、ものすごいハードな仕事を想像すると思いますが、ぼくの小さな活動が地域を安全に守れるなら、これからも続けていきたいと思いました。

また、小さなこどもたちからお年寄りにもみんなの役にたてるような、ボランティア活動を１つでも、多く見つけてこれからも進んでやりたいと思いました。

ぼくは、今住んでいる地域が大好きです。地域の人たち全員が安心笑顔いっぱいに生活できますように。

＜平成27年度ふれあいボランティア活動大賞＞

地域のお年寄りの方との関わりを通して

福岡県大牟田市立駛馬南小学校６年生

私たちは、総合的な学習の時間に、大牟田市の高齢化率が高いこと、中でも、駛馬南校区が上位を占めていることを知りました。さらに、その問題の 1 つとして、認知症に対する対応が挙がっていることを知りました。そこで、これらの問題に対し、今の私達にできることは何かについて考えました。

5 年生の時には、校区にお住まいの 1 人暮らしの高齢者の方々を訪問しました。短い時間だったけど、おじいちゃんやおばあちゃんはもちろん、私たち自身が温かい気持ちになれました。また、1 年を通して、駛馬南小学校全児童で、季節のお便りを出しています。中には、大変喜ばれ、学校にお礼の電話やお手紙をいただくこともあります。

6年生では、1学期に施設の職員の方と一緒に、認知症の方々とどう関わっていけばいいかを自分たちで考え、対応できるよう学習をしました。

このように、この駛馬南校区が、そして、この大牟田が、もっともっと住みよい町になるよう、もっともっと温かい関わりのある町になるよう、12 歳の私たちにできることを考え、取り組んでいきます。

私のおじいちゃんは、数年前に亡くなりました。

「２０２０年のオリンピック、一緒に行こうね。」

と約束していたのですが、その夢は叶いませんでした。だからこそ、私たちの身近にいらっしゃる方々には、これまでの学習を生かし、本当のおじいちゃん、おばあちゃんのように、やさしく、ゆっくりと笑顔で接していきたいです。

そして、これからも、私たちにできることにたくさん取り組んでいきます。この駛馬南小学校が、大牟田が、もっともっと温かい関わりのある町になるために。

［中学生］

＜令和２年度中学生賞＞

身近な人とボランティア

東京都小平市立小平第五中学校１年生

私が行ったボランティア活動は、「小平すごろく作り」です。私の住んでいる小平市の魅力をアピールしようと思い、自粛期間中に作りました。作っているうちに、地域の魅力を知ることもでき、楽しかったです。

ボランティア活動として「すごろく」を選んだ理由は、外に出られない状況で「ふれあう」には、すごろくがいいと思ったからです。すごろくの具体的な内容には、小平市のキャラクターや食べ物、場所を取り入れました。

自粛期間中、実際に家族と遊んでみました。家族も楽しいと言ってくれ、作ってよかったと感じました。

自粛期間が終わってからも、友達と遊んで、「もう一度やりたい」と言ってくれたので、うれしかったです。

このように、家族も友達も、年齢を問わず楽しめるので、もっといろんな人に楽しんでほしいと思っていました。

そんなとき、母が「こだいら観光まちづくり協会」というところに、すごろくを見せに行ってくれました。みなさんが真剣にすごろくを見てくださり、良いと言っていただいたので、改めて作って良かったと思いました。

この経験で、「ふれあう」ということは、家族など身近な人とでもできるんだ、と気付きました。また、小平の魅力を知ってほしいという気持ちも高まりました。ウイルスがおさまったら、いろんな人とこのすごろくで遊んでほしいです。

＜令和３年度ふれあいボランティア活動大賞＞

ひまわりに背中を押されて

東京都小平市立小平第五中学校１年生

8 月は朝から既に日差しが強い。夏休みだというのに僕は 6 時に起き支度をして公園へ向かう。眠いし暑い。何故このボランティアを引き受けてしまったのだろう･･･毎朝後悔しながら公園の花に水やりをする。

僕がこのボランティアを始めたきっかけは

「夏休みに公園の花の水やりをしてみない？」

という母の一言だった。僕は地域の高齢者がその公園に花を植え草取りをして地域の憩いの場となるように綺麗に維持していることを知っていた。休みの日に集まり作業している姿を何度も見ていたからだ。けれど僕は、「地域のために役立つ仕事をしたい」という思いよりも先に、この水やりには友達も一緒だという楽しみと興味本位だけで引き受けた。

ホースで水を撒く。友達と水かけっこをしてびしょ濡れで帰宅することもあった。楽しかった。

水やりボランティアを始めて半月ほど経った時、僕は花が萎れていることに気がついた。前日まで綺麗に咲いていただろうその白い花は頭を下げ、元気がないことは花に興味がない僕でもすぐに分かった。昨日からこんな姿だったのか。他の花はどうだったのか。思い出そうとしても思い出せなかった。

僕は急に罪悪感に襲われた。僕が枯らしてしまったのかも知れない。帰りがけに「ありがとう。」と言われた。心が騒ついた。そう言われるだけのことをしていたのだろうか。

その日から僕の水やりに対する気持ちが変わった。水は行き届いているのか、元気のない花はないか観察するようになった。そして、花の命は短いからこそ、少しでも長く咲いていて欲しい、その花の姿を見て癒される人がいるかもしれないと感じるようになった。

夏休みが終わり、2 学期初日。いつもの様に公園を通り過ぎた。ひまわりが太陽の様に輝いて見えた。そのひまわりを見て僕は「2 学期も頑張るぞ」と思った。

＜平成 25 年度ふれあいボランティア活動大賞＞

祭の準備に参加して

静岡県袋井市立袋井南中学校２年生

町中に笛や太この音が響き、祭青年が騒ぐ声がする。道路や屋台のちょうちんが灯りまぶしい。楽しみにしていた袋井祭が始まった。

祭の 1 週間前、私は友達と一緒に祭の準備に参加した。この祭の準備は毎年参加している。小学生だったときは、暇だからとか、準備が終わったらアイスがもらえるからという理由で参加していたが、中学生になってからは変わった。祭の参加者として祭の準備に参加したいという気持ちがでてきたのだ。

気持ちが変わって、いろいろなことが分かってきた。祭の準備に参加している人は、祭の中心である祭青年がやっているものだと思っていたが、50 代、60 代の人が多くいることが分かった。しかも、若い祭青年に負けないぐらい声を出し、力仕事をしていた。また、女の人たちは男の人たちが力仕事をしている間に、細かい作業をしていたり、小学生の世話をしていたりした。祭の裏側にはたくさんの人の協力があったんだと分かり、その一員に私も入れていることがすごくうれしかった。

その日はすごく暑い日だった。でも祭青年は良い祭にするためにどんなにきつくても頑張っていた。中学生の私たちに、

「暑いけど大丈夫？」

と声をかけてきてくれるほどだった。私たちもそれに答えるように積極的に準備を行った。そして、祭本番は安全で楽しい祭になった。

祭の裏側にはたくさんの人がいて、安全に祭ができるのもその人たちのおかげなんだとあらためて思った。そして地域の人の役に立つことの良さが分かった。これからも地域のボランティアには積極的に参加していこうと思う。

＜平成 26 年度ふれあいボランティア活動大賞＞

ふれあいボランティアを通じて

東京都武蔵村山市立小中一貫校村山学園中学校２年生

ふれあいボランティアを通じて、私が疑問に思った事は、「人と触れ合う事で何が生まれるのか」です。

私は元々他人と関わる事が苦手で、どちらかと言うとボランティアなどの人と関わる活動はあまり自分から進んでは参加しませんでした。

今回ふれあいボランティアに参加した理由は、苦手な事を徐々に無くしていこう、と思ったのと、自分を少し変えてみたい、と思ったからです。

私が参加したボランティアの中で、一番印象に残っているのは、高齢者在宅サービスセンターでのボランティアです。はじめは凄く緊張したし、失敗をしてしまうのではないかと不安だらけでしたが、センターの方や、一緒に参加していた友達が分からない事を優しく教えてくれたり、そこにいるおじいさんおばあさん達が明るく話しかけてくれたりして、数時間ですぐとけ込む事ができました。

3 日間ボランティアをさせてもらい、感じた事は、たった 3 日間だけでとても親しくなれた事と、その分別れがとても悲しかった事です。最終日の最後のお手伝いで、高齢者の方を帰りのバスの所まで連れていっていた時、沢山の方に「3 日間お疲れ様、お世話してくれてありがとう」と声をかけてもらい、思わず涙が出そうになりました。

ボランティアを終えて、私が疑問に思っていた「人と触れ合う事で何が生まれるのか。」その何かは、私は絆だと思いました。人と関わる事でその人の良さと個性が見え、それを理解して絆は生まれるのではないかと思いました。

私にとって今回のふれあいボランティアは、自分を改める良い機会になりました。

［高校生］

＜平成 26 年度高校生賞＞

勇気がもたらした私の成長

長野県立長野西高等学校１年生

中学時代の私は、居場所を求めて生きるのに必死だった。しかし、徐々に居場所が遠のき、アイデンティティを失ったその延長線上で私は、高校 1 年の梅雨時に鬱病を患った。絶望の中、先生が長野西高校通信制を紹介してくれた。私は弱い自分を変えたい一心で編入した。学校生活が安定し始めた頃、サマーチャレンジボランティアを知った。私はボランティアの知識は皆無だったが、ボランティアを学ぼうとする向上心が湧き、ボランティア活動に参加した。

高齢者と触れ合いたいと思い、介護施設を訪れた。2 日目の慣れ始めた頃、脳に障がいをもった 60 代の男性が 1 人でいた。話し掛けるか迷っていると、施設の所長さんが私の背中を押してくれた。“よろしく頼んだ”と、太い一声に勇気が泉のように湧き、真心込めてコミュニケーションをはかった。折り紙を丁寧に教えていると、その男性は折り紙を手で掴み、折り始めた。真心があれば、障がい関係なく気持ちが伝わることに感動した。私は所長さんに今も感謝して忘れない。

私はこの経験からボランティア活動を通して、様々な世代の人と話し合いたいと思うようになった。

現在、高校生ボランティア団体に入り活動している。同年代の人々との交流も私の今までの引っ込み思案という性格を変えていった。その根本要因に相互扶助がある。私は、ボランティア活動を通して真心で多くの人と接したいと思い高校にボランティア部を結成する決意をした。決意から 2 ヶ月後に先生方と生徒達に認めて頂きボランティア部が結成した。

私の成長は、病気が原点である。ボランティア活動が、“私と他人”という見えざる壁を打破した。私はこれからも勇気を出して多くのボランティア活動をする中で成長していきたい。

＜平成 30 年度ふれあいボランティア活動大賞＞

子ども食堂での触れ合い

東京都立稔ヶ丘高等学校３年生

私は月に 1 回地域の子ども食堂でボランティアをやっている。主な内容としては、料理を子ども達や、ボランティアの方と一緒に作ったり、子ども達の勉強を教えたり、話し相手になったりしています。私は主に子どもたちの話相手や、料理を子ども達と一緒に作ったりしています。最初は子ども達も警戒し、自分から話しかけてくれることはほぼほぼなかったのですが、自分から話を振っていくうちに、打ち解けてくれ、お互いニックネームで呼ぶくらい仲良くなっていきました。

最初は私自身、子ども食堂の利用者側として子ども食堂を利用していました。高校 2 年生の頃から利用者という立場は変わらないものの、一ボランティアとしても参加するようになりました。一ボランティアとして参加するようになってからわかったことがあります。

それは、子ども一人一人を見る重要さです。子ども達の性格、特長、趣味などは当然違うので、一人一人の子に合った対応の仕方をしなければなりません。子どもは傷つきやすいので、発言一つ一つに気をつけなければなりません。また、大人しくすごしたい子もいれば、みんなでワイワイ騒ぎたい子もいます。その子自身を見て、どのように話しかけたらいいのかなどを考えるのも重要だと学ぶことができました。

私は将来、不登校の子どもや、家庭に問題のある子ども達を支援するスクールソーシャルワーカーになりたいと考えています。また、行く行くは地域の居場所になるような場所を作りたいと考えています。まだまだ自分は未熟で学ぶべきこともたくさんあります。これからも子ども食堂のボランティアを続けていきます。

＜令和元年度高校生賞＞

夢につながるボランティア

東京都立淵江高等学校３年生

私は高校生活の 3 年間、軽音楽部として施設で演奏のボランティア活動をしてきました。その中でも一番印象に残っているのは、高校 3 年生の時に行ったあかしやの森という施設で行ったボランティア活動です。

私は普段軽音楽部で、優勝することを目指して練習してきました。その活動の中で一番楽しみにしていたのが、施設での演奏のボランティアを行う事でした。何故かというと、1 つの音楽を一緒に作る事ができるからです。例えば、知っている曲があれば歌ってくれたり、手拍子をしてくれます。他のボランティアとは違い、演奏のボランティアは、その場にいる全ての人で 1 つの物を作ることができるので私は大好きです。高校 3 年生の夏に私はあかしやの森で演奏をしました。その日はＪ−ＰＯＰを演奏しました。演奏中利用者の方は、一緒に歌ってくれたり、タオルをまわしてくれたりしました。演奏している私達も楽しめて、無事に終わることができました。終わった時、利用者さんが私の手を取り、「本当に楽しかった。ありがとう。」と言ってくださいました。その時私は、すごくうれしくて、卒業してもこの活動を続けたいと思いました。私は家に帰ってから調べて、音楽セラピーという言葉を知りました。私はその時、春から看護学校に通うことが決まっていたので、看護師になって音楽セラピーについて学びたいと思いました。

ボランティア活動を通して、私は音楽で 1 つになれる楽しさだけでなく、将来の目標を見つけることができました。そして、私の得意な事で、誰かの為に何かできる事を知り、自信がつきました。春から看護学校に通い、音楽セラピーを学び、今後もボランティア活動をしていきたいです。

ふれあいボランティアパスポートを活用したボランティア体験学習の効果
－佐賀県神埼市における実践・調査報告書－

発行日　2022 年 3 月 31 日
執　筆　有馬 正史（認定ＮＰＯ法人さわやか青少年センター主任研究員）
松山 真理（認定ＮＰＯ法人さわやか青少年センター研究員）
監　修　田中 雅文（日本女子大学人間社会学部教授）
発行者　認定ＮＰＯ法人さわやか青少年センター
〒167-0032　東京都杉並区天沼 3-7-3　荻窪法人会館３階
TEL：03-6279-9236　　FAX：03-6279-9256